
真・恋姫無双～つながり伝～

茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜つながり伝〜

【Nコード】

N5560Q

【作者名】

茜

【あらすじ】

世界を旅する青年は三国志の世界に来た。

彼は、その世界のつながりを守りきれるのか。

すべては、天のみぞ知る。

主人公設定（前書き）

少し編集しました。

一度読んだ人、すいません。

では、どうぞ。

主人公設定

名前…姫神茜 ひめがみあかね

偽名…性、姫名、神字、刀赤真名、茜 き しん どうせき あかね

性別…男

年齢…16歳（見た目） 実際…164423903歳（不老不死）

※身長…165cm

※体重…61kg

※自由に変えれます

髪…赤と黒の間ぐらい（紅？）のセミロング

（モデルはアニメ【ハヤテのごとく！】のオリキャラ、姫神茜です。三つ編みと仮面はなしです。性格はかなり違います。）

基本、誰にでも優しく人を受け入れる範囲が広いです。でも、例外はあります。（例…外道な悪人、つながりを断ち切る奴、貂蟬 ゲイ）

武器…色々、基本は紅（刀）と零 カード

強さ

神＞茜＞恋（呂布）＞本気の鈴々（張飛）≧愛紗（関羽）|| 春蘭

（夏侯惇）＞紙

能力

つながりの力

ドラクエやFFでいうMP。別世界で様々な人たちと何らかのつながりをもつことによって使える力。時間があれば徐々に回復していく。用途は色々。

詳しくは本編で説明します。

主人公設定（後書き）

という感じですよ。

違いがわかりにくいです。すいません。

次回、最初の仲間ができます。

青年×異世界×恋姫（前書き）

少し書き直しました。

ロボガミの台詞を少し分かりやすくしました。

自分でも結構気にしてました。

では、どうぞ。

青年×異世界×恋姫

時は三国志、此処に一人の青年がいた。彼の名は「姫神 茜」。彼は、この世界の人間ではない。彼は、様々な世界を旅して「つながり」を守る者である。その他ならば、なんの躊躇い（ためらい）もなく人を殺すことさえできるのである。そして、彼は……………

茜「此処は、どこでしょうか？」

現状を理解していなかった……………

※回想

茜「この世界でやることは終わりましたね……………」

ある草原で、茜は一人呟いて（つぶやいて）いた。

茜「……………」

茜はこの世界のつながりを守った。そして、新たなつながりを作った。

茜「ふふ、やはりつながりとは素晴らしいですね♪」

だからこそ別れは辛いものである。だか、茜の顔には悲しみの表情など微塵もない。

茜「さて、次の世界に行くのでしょうか『トリップゲート』」

茜が一つの方向を指差してさういうと、そこに茜の三倍はある黒い大きな穴が現れた。

【トリップゲート】

つながりの力でそことは異なる別の異世界に行くための次元の歪み（ゆがみ）を作り出す能力。出る場所を決められないのが唯一の欠点である。

茜「さて、次はどんなつながりに出会うか楽しみですね♪」

意氣揚々としながら穴に入ろうとしたその時、

「チョットマテコラ（ちよつと待てこら）――！！！！！！」

茜の後ろから怒りと機械音がまじったようなハスキーな声が聞こえてきた。正確には斜め後ろから聞こえてきた。

「オラ、――――！！！！！」

そして声の人物は茜に向かって跳び蹴り喰らわした。いや、喰らわせようとした。

スツ

だが茜は最低限の動きで跳び蹴りを軽くかわし……

ドツ
ゴ
ー
ー
ン

「ウーガ！　！　！　！　！　！　！」

声の人物は近くにあつた大岩に直撃した。

茜「いきなり跳び蹴りをして来るなんて、何のつもりですか？ロボガミ」

茜は少し呆れながら声の人物に聞いた。そこには、頭から茜そっくりの赤いセミロングを生やしたロボット、ロボガミが頭から煙を出しながら大岩に突き刺さっていた。

バコッ

ロボ「何のつもりですか？」、ジャナイハコノアホガ（じゃないはこのアホが）！！オマエガイツタラワシハドウヤツテイセカイニイクンジャ（お前が行ったらわしはどうやって異世界に行くんじゃ）！！？」

自力で岩から抜け出したロボガミは茜に対して怒りをぶつけながら理由を言う。

茜「あっ」

ロボ「ワスレテタンダナ（忘れてたんだな）！！？？」

茜「いえ、忘れてませんよ。安心してください」

ロボ「サッキ（さっき）」「あっ」テイッタジャナイカ（て言ったじゃないか）！！」

茜「あれは貴方の存在を今思い出したんです」

ロボ「ヨケイタチガワルイワ（余計たちが悪いわ）！！！！？？」

余りの怒りにもはやロボガミは軽くオーバーヒートしていた。無理もない。何しろ先程まで目の前の人物に存在自体を忘れられてたのだから。ちなみにロボガミはこの世界の住人ではなく茜が作った戦闘ロボである。

茜「まあ細かいことは気にしないでください」

ロボ「コマカクナイ（細くない）！」

茜「わかりましたから速くいきますよ」

ロボ「ツテ、オイ。ハナシワマダオワツテ（って、おい。話はまだ終わって）」「ドンッ」ウガ！？」
ブォーン

茜はロボガミの話など聞く耳持たず、有無をいわずロボガミを穴につきとばした。

茜「さて、私も行くとしますか」

ブォーン

そして茜もロボガミに続いて穴入っていった。

ブォーン

茜「ふう、やっと抜けれ……」

茜の言葉は途中で止まった。なぜなら……

チュンチュン♪チュンチュン♪

目の前で鳥達が楽しそうに歌っていたからだ。この時、茜の頭にある恐ろしい仮説が芽生えた。

鳥は本来そら飛ぶ生き物、だが今自分の前で鳥達が飛んでいる。そして足下に妙な浮遊感を感じる。そして茜は自分の最悪な仮説がはずれてくれることを願いながらゆっくり足下をみた結果、

無駄だった事を実感した。ここまでの時間0・05秒、というわけ
で……………

ピューーーーーー

見事に落下中なわけです。

茜「いえ、落ち着くんです。こういう時こそ冷静になって考えるんです」

さすがに無駄に長く生きているだけあってこのぐらいのことなら冷静でいられるようだ。

茜「無駄に」は余計です」

すみません？

ちなみにまだ落下中です（笑）

茜「とりあえず試してみますか」

そういうと茜は右手を人差し指と中指を立ててそれを自分の額にあて、

茜『万華鏡』

突然3人に分身し、

茜『スワイプ』

つながりの力となった2人の分身を口から吸収した後下の方角を向
き、

茜「（今です）」

茜『姫神砲』（ひめがみほう）

ドガーーン

一気に放出して衝撃を押し殺して着地した。地面の姫神砲が当たっ
た箇所にはクレーターが出来ていた。

【万華鏡】

つながりの力で自分の分身を作り出す技。分身の能力は本体の10
分の1まで下がる。

【スワイプ】

万華鏡で造られた分身を一定の箇所に吸収して強化する能力。口か
ら吸収することによって姫神弾や姫神砲など技を使用できる。

【姫神砲】

口に吸収したつながりの力を高密度に膨張させて一気に放射する技。吸収した分身が多いほど威力が増す。分身一体で自分3倍はある大岩を破壊できる。

茜「ふう、助かりました」

何とか危機を回避してほっとしている茜。

茜「それにしても」

茜は周りを見渡した。

茜「……………」

茜「此处は、どこでしょうか？」

そこは辺り一面が荒野だった

※回想終了

そして、現在にいたる。

茜「取りあえずまずは情報ですね。ロボガミはどう思いますか？」

茜はロボガミの意見も聞いてみることにした。が…

シューーン

そこにロボガミの姿はなかった。

茜「……………」

茜「ひよつとして……時間差で入ったから出る場所がズレたのでしようか？」

そう、茜はロボガミを穴につきとばした後に入ったからその小さなズレが穴の中では大きなズレとなってしまったのである。

茜「仕方ないですね。とりあえずロボガミは後で探すとして、まずは「おい、兄ちゃん」？」

突然話しかけられたら茜はそちらの方を見るとそこには3人の賊のような風貌の男達がいた。

？「死にたくなかったらそのめずらしい剣と服を置いてきな」

リーダーらしき髭の男が言った。因みに今の茜の服装は左右対称で執事服のような赤い服である。

茜「（この人達は、盗賊でしょうか？）」

？「やいテメエ、アニキが置いてけっていつてんだから置いてきやがれ！」

？「おいてくんだなあ」

今度はチビとデブの男がいつてきた。

茜「（この人達に生きる価値があるかどうか、確かめてみますか。）
ちよつといいですか？」

髭「ああ？」

茜「あなたはみたところ盗賊の用ですが何故こんな事してるんですか？」

茜がアニキと呼ばれていた髭の男に聞いた。

髭「そんな楽しいからに決まってるだろうが」

アニキと呼ばれていた男はニヤニヤと笑いながらも当然のように言った。

茜「（この人達に…いえ、こいつらに生きる価値はないですね……）
決めました。」

髭「ああ？」

茜「あなた達には、此処で死んでもらいます。」

そう言うとき茜は左手 に持っていた紅（刀）を抜刀して

ザシュッ

チビの男の首はねた。

二人「！」

茜「隙だらけですよ」

茜は紅を逆手に持ち直し、体をデブの男 に向けると同時に

グシュッ

デブの首を切り落とした。

髭「チビ！デク！」

茜「後は貴方だけですな。」

そして茜はいつの間にかアニキと呼ばれていた男の後ろに回り込んで首に刀をあてながら言った。

髭「ま、待ってくれ！俺が悪かった！だから命だけは「嫌です」」

ザシュッ

茜がそう言うと同時にアニキと呼ばれていた男は首を切り落とされて絶命した。

茜「来世では、良きつながりと人生を…」

茜は死体を見下ろしながら、静かにそういった……………

茜「ん？」

死体を見下ろしていた時、妙な感覚が茜の心をくすぐった。

茜「……………」

ゴソゴソ

茜は無言のまま死体を調べていた。どうやら何かを探しているようだ。

茜「これでしょうか？」

すると茜は一冊の書物を見つけた。

茜「……………」

茜はその書物をじっと見ていた。

茜「（この書物から妙な力を感じますね、一体何なのでしょうか）」

好奇心がそそられ、茜はその書物を開こうとしたその時、

茜「あっ」

突如強い風が吹き、書物は何処かへとばされてしまった。

茜「……………」

茜は無言のまま書物がとばされてしまった方向を眺めていた。

茜「まあいいでしょう♪無くて困るわけでもありませんし」

どうやら前向きに考えることにしたようだ。これが後に茜の新たな出会い導くのを、この時の茜は知らなかった。

茜「さて、何時まで見てるつもりですか？」

茜が大岩の方を向きながら言った時

？「おや、気づいておられましたか。一体何時からですか？」

岩の影から槍を持った青髪の女性が出て来た。

茜「最初からです。少なくとも奴らに攻撃した時には既にいたはず
です」

青髪「ほお？ 気配を消していたのだが、こうも簡単に見破られると
は」

茜「いえ、確かに気配はに消えていました。ですがどんなに頑張っ
てもつながりの力は消しようがないですから」

青髪「つながりの力とは？」

聞き慣れない単語に青い髪の女性が反応した。

茜「人は必ず友達や家族、恋人などのように何らかのつながりがあ
ってそのつながりによって体からある一定の波動を放出しているん
です。それがつながりの力です」

青髪「それは中々面白い考えた。それでその事とどういった関係が」

茜「私は、そのつながりの力を操る力をもっているんです。隠れる事にきずいたのは貴方のつながりの力を感じ取ったからです。勿論そこにまだ2人隠れている事も、それが貴方の友達だという事もわかりますよ」

茜がさっきまで青い髪の女性が隠れていた大岩を指差して言う。

青髪「!どうやらすべてお見通しのようだな。稟、風、どう思う?」

すると、岩の影から 眼鏡をかけたいかにもクラスの委員長のような少女と頭に妙なオブジェをのせて口にペロペロキャンディをくわえた幼女に見えなくもない体格の少女が現れた。

眼鏡「嘘は言っていないようですが……にわかには信じられないですね」

オブ「ですが、風たちに気づいておきながら何もしてこないところを見ると、悪い人ではないと思いますー」

2人の少女は各々意見を言った。

茜「ところで、一つ聞いてもいいですか?」

オブ「なんですかー?」

茜「あれは、一体何なのでしょう?」

そういつて茜が指差した方向には、遠くから数十名もの人が 馬に乗ってこちらへ駆けてくる。

オブ「たぶん、この辺りの官軍ではないかとー。これは面倒ですなー」

茜「何故ですか？」

眼鏡「訳あって今わ見つかるわけにはいかないんです」

茜「そうですか、でしたら一旦近くの町へ逃げましょう。話しの続きはそこですますので」

眼鏡「すみません。巻き込んでしまつて」

眼鏡の少女が茜に謝った。

茜「いえ、気にしないでください。寧ろ可愛い女の子に三人も出会えたんですから喜びこそすれ怒る理由などありません」

茜はとても爽やかな笑顔で言った。

青髪・眼鏡「／／／／」
オ「ぐうー？」

茜「いや、起きてください。」

オブ「おお！？余りに齒の浮く台詞に眠ってしまいましたー」

茜「いえ、可愛いものを可愛いと言ってなにが悪いんですか？」

オブ「／／／……お兄さんはまず自分の言葉の破壊力を知るべきなのですよー」

茜「？」

このようなやりとりをしながら一行は町に向かって行った。この時、この3人こそがこの世界での最初のつながりとなる事を茜は知らなかった…………

青年×異世界×恋姫（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分ではましになった方だと思います。皆さんからみて駄目だったらすいません。

次回、仲間ができます。最後のオマケ、少しだけ変えました。内容は同じです。

つながり×御使い×臣下の礼（前書き）

何とか書けました。

内容は全く変わりません。強いて云うなら名前と風の喋り方が微妙に変わってます。

オマケは少し変わりました。内容は変わってません。つまり少しエロあります。嫌な場合はオマケを見ない事を進めます。

では、どうぞ。

つながり×御使い×臣下の礼

あの後、茜達はある町に着いた。だが、途中モタモタしていたせいか既に夕方になっていた。具体的には、茜が可愛いや綺麗などの単語を無意識に連発していたことが原因だが、茜自身は鈍感だったが故に気づくことはなかった。

そして現在

茜「とりあえずまずは宿を取りませんか？そこで色々話しますので」

茜が三人に提案する。因みに、まだ自己紹介もしていないので三人の名前は知らない。

オブ「そうですねー、ではその時にお兄さんの事を根掘り葉掘り聞かせてもらいますー」

眼鏡「風！………すいません。後で言って聞かせておきますので……」

風と呼ばれた頭にオブジェをのせた子を眼鏡をかけた少女が叱って茜に謝った。

茜「気にしないで下さい。自分が怪しい事は自分が一番わかってますので。では行きましょう」

だが茜自信は全く気にしていなかった。そして茜達は宿へ向かった。

茜「せっかくですのでお代は私が出します」

宿に着いて部屋を取ろうとした時に、茜が言った。

眼「そんな！それはさすがに失礼です」

だが眼鏡の少女もそれを拒否した。まあこの反応が普通である。何しろ自分達の分のお代をたった今出会ったばかりの人が払うといったのだから。

茜「いえ、私も皆さんには迷惑をかけてますからそのお詫びとでも

思ってください」

だが茜は何が何でも払う気満々の用である。

眼鏡「ですが…」

オブ「稟ちゃん、お兄さんがここまで言ってるのですからここはお言葉に甘えさせてもらいましょう」

頭にオブジェをのせた子が言った。

眼「……わかりました。ではお願いします」

どうやら諦めたようだ。

茜「はい、では少々お待ちください」

そう言うのと、茜はなにもない所に手を出した。

三人「「「???」」」」

三人もこの行動には不思議に思ったらしい。だが、次の瞬間

茜『クリエイト』

茜の手には握り拳二つ分ぐらいの大きさの金の塊が現れた。

三人「「!!!」」」

さすがに三人もこれには驚いた。さらには宿のおじさんまで驚いている。

【クリエイト】

つながりの力で異空間に入れてあるものを出す力。異空間の中は無限に続いているのでいくらでも入る上にある一定の位置は時間が止まっているので食べ物を入れても永久に腐らない。

茜「とりあえずこれで足りますか？」

そういつて茜お金を おじさんに差し出す。

おじ「いや、こんな物貰えませんよ！」

そういつておじさんは金を突き返そうとする。

茜「いえ、このぐらいの物ならいくらでもありますので気にせず受

け取ってください」

サラッと凄いことを言って再び金を差し出す。

おじ「そうですか？では…」

そう言っておじさんは金を受け取る。

茜「それでは行きましょう……って、どうしたのですか？」

茜は振り向いて後ろにいた三人に話し掛けた。だか三人は未だに啞然としていた。

眼鏡「今のは一体なんですか？」

やがて正気を取り戻した眼鏡の少女が聞いた。

茜「それも後で説明します。まずは部屋に行きましょう」

そう言って三人と部屋へ向かった。

茜「では、説明の前にまずは自己紹介をしませんか？」

部屋に入ってから茜が言った。

青髪「そうですね、私は趙雲、字は子龍と申す」

青い髪の少女、趙雲が言った。

茜「（趙雲？ということは、此処は三国志の世界ですか。でも趙雲は男ではなかったでしょうか？）」

オブ「風は程立、字は仲徳といいますー、こっちは宝慧ですー」

？「よろしくな、兄ちゃん」

頭にオブジェをのせた少女、程立とその頭のオブジェ、宝慧が言った。

茜「（今、オブジェが喋ってましたが腹話術でしょうか？それとも……）」

眼鏡「私は戯志才と申します」

眼鏡をかけた少女、戯志才が言った。

茜「（ん？これは偽名ではないでしょうか？）」

程立「それで、お兄さんは何というんですかー？」

偽名の事を不思議に思っている時、程立が聞いてきた。

茜「あ、すみません。名前聞いて自分が名乗らないのは失礼ですね。
姫神 茜。それが私の名前です」

程立に言われた事を謝罪して、茜は自分の名前を言った。

趙「ほう、変わった名前ですな。性が姫、名が神、字が茜ですかな
？」

茜「いえ、性が姫神で名が茜です。字はありません」

趙「字がないとは、ますます変わってますな」

茜「私がいたところでは普通でしたので」

趙雲の疑問に茜は答えた。

戯志才「では茜殿はどこから来たんですか？」

戯志才が聞いた

茜「そうですね。正直説明しにくいですが、強いていうならアソコからですね」

そう言って茜は窓から空を指差して言った。嘘は行ってない。実際茜はこの世界に来了た時空から落ちてきたのだから。

趙雲「では姫神殿は天の国から来たのですか？」

茜の言った事に趙雲が聞いてきた。

茜「当たらずとも、遠からずって感じですね。ハッキリ言うと、私は異世界から来ました」

三人「「異世界？」」「」

茜「やはり最初から説明すべきですね。『クリエイト』」

そう言って茜はいくつかの小さな球を出した。

茜「まず、これがこの世界だとします」

そういつて球を一個置いた。

茜「そして次に、これが私がいた世界だとします」

そう言ってもう一個球を置いた。

茜「こんな感じで此処とは異なる世界があるのです。とりあえず貴方達でいう天の国とでも思ってお下さい、そして……」

すると茜は手に持っていた球をすべて置きだした。

茜「こんな風に世界とは一つや二つではなくいくつもあるんです。ここまではいいですか？」

三人は頷いた。

茜「そして私があなた方に話したつながりの力ですが、私はこのつながりの力で様々な特殊な力を使えるんです」

程立「ではお兄さんが先程から手から色々な物だしていたのはその力なのですか？」

茜の説明に程立が質問を投げ出す。

茜「そうです。因みにあればクリエイトと言ってある場所に閉まっている物を何時でも好きな時に出せる能力です。そうですね、趙雲さんは何か好きな食べ物がありますか？」

突然趙雲に質問する。

趙雲「好きな食べ物ですか？当然メンマですな」

さも当然の用に言う趙雲に対し、戯志才はまたか、というような顔をしている。

茜「メンマですか、では少々お待ち下さい。『クリエイト』」

するとメンマの入った壺が現れた。

茜「どうぞ、姫神家特性のメンマです」

そういつて趙雲に壺ごとメンマを差し出す。

趙「おお！これは正しくメンマ！姫神殿！ありがとうございます」

そう言うって趙雲はメンマを嬉しそうに食べる。

茜「とりあえずこんな感じですよ。他に欲しい物があつたら言つて下さい」

茜がそう言つと、

程立「それじゃあ風は飴が舐めたいですよー」

趙雲「なら私は天の国の酒を」

程立と趙雲が思いつきり食い付いてきた。

戯志才「こら星！風！そんなに色々頼んでは「はい、どうぞ」って、もう出したんですか！？」

茜の余りの手際よさに戯志才は思わずツツコんだ。

茜「とりあえず食べながらでいいので、続きを聞いて下さい」

そう言つて続きを話し出す。

茜「さっきのようにつながりの力は様々な能力を使えるのですが、その中に異世界に行ける能力があるんです。私はそれを使って色々な世界を旅して回っているんです」

三人は茜の話しを食い入るように聞いていた。

程立「ではお兄さんは何故旅をしてるのですか？」

程立のこの言葉に他の二人も茜が旅をしている理由が気になった。

茜「つながりを……守るためです……」

茜は静かに言った。

茜「私は多分全ての世界の中で一番つながりの事を知っています。それ故に……つながりを失った時の悲しさも知っています……だからこそ、その悲しみを他の人に受けてほしくないんです……」

三人は静かに聞いていた。

茜「だから私は旅をしているんです。私自信の手で、つながりを守るために……」

戯志才「では、この世界へ来たのも」

茜「はい、つながりを守る事です。そして、それにはこの世界を平和にしなくてはいいけません」

三人「「!?!」」

茜「此処がどういう世界なのかは既にわかっています。この世界のつながりが失われる原因は混沌の世の中、つまりこの世界その物です」

そう、此処が三国志の世界ならつながりが失われる一番の理由は戦争による死、そして世界その物が腐っているのが戦争の原因なのだ。

茜「世界その物が腐っているのなら……私がこの混沌の世の中を平和へ導きます。つながりを……守るために……」

これを聞いた三人は考えが一つになった。

趙雲「稟、風。」

戲志才「はい。」

程立「わかってますよー」

趙雲が二人に確認するように聞いた。

茜「私の話しは、これで終わりです。何か質問はありますでしょうか。」

茜が三人に聞いた。

趙「質問ですか。では、姫神殿」

スッ

茜「！」

茜は驚いた。何故なら、先程まで自分の話しを聞いていた三人が突然臣下の礼を行ったのだから。

趙雲「我らにその大役、手伝わせてもらえぬでしょうか？」

その言葉に、茜はさらに驚いた。

茜「理由を聞いても宜しいでしょうか？」

とりあえず、理由を聞いてみた。

趙雲「実は今、都ではある噂流れているのです」

茜「噂？」

戯志才「自称大陸一の占い師、管輅の預言で《天より流星が舞い降りし時、紅き衣を纏いし者現る。その物は、異能の力で乱世を平和へと導く天の御使いである》といった物です」

程立「風たちは流星が落ちるのを目撃してそれを確かめに行たらそこでお兄さんに会ったのです」

戯志才「貴方のその見た事のない紅い服に特殊な力、正直私たちは貴方が天の御使いではないかと思っていました」

趙雲「そして先程の言葉で確信しました。貴方こそが我らが仕えるべき方で、この乱世を平和へと導く天の御使いだと。ですから我らは貴方に仕えようと思ったのです。我らは今より、貴方様を主とし、貴方様の家臣として仕えることを誓う。どうか我らを…お側に置いて頂きたい」

その言葉を最後に三人は頭を下げた。

茜「なる程、貴方たちの気持ちはよくわかりました。ですが、私は部下はいりません」

その言葉に、三人はとても落胆したが、

茜「ですが、同じ志をもつ仲間というつながりは欲しいと思っています

ます。私とつながりを持ってくれませんか？」

茜のこの言葉に、三人の顔に再び輝きが戻った。

三人「「是非よろしく願いします（しますー）！」「」」

茜「はい、よろしく願いします趙雲さん、程立さん、戯志才さん」

趙雲「主、私の事は星とお呼び下さい。我が真名でございます」

程立「風の真名は風ふうと言うのですー」

戯志才「茜殿、実は私は訳あって偽名を使っていました。ですので改めて名乗らせて下さい」

戯志才が頭を下げながら言った。

茜「やはり偽名でしたか」

星「気づいてたのですか？」

茜「はい、名乗る時言い慣れてないような気がしたのでそうではないかと思ったんです」

戯志才「全とお見通しの用ですね。では改めて、私は郭嘉、字は奉孝、真名は稟りんです」

改めて郭嘉こと稟が名乗った。

茜「はい、お願いします。ところで、一つ聞いてもいいですか？」

稟「何ですか？」

茜「先程から言っている真名とは何ですか？」

茜は自分の聞き慣れない単語について聞いた。

稟「真名を知らないんですか？」

茜「はい、聞いたことのない単語です」

とりあえず説明する事にした。

稟「真名というのはその人の本当の名でとても神聖な物で自分が許した者だけが呼べるんです。許可無く呼べば問答無用で殺されてもおかしくないのです」

茜「そんなに大切な物を私に預けて貰えるとは嬉しい限りです。できれば私も渡したいのですが、私には真名が無いんです。強いていうなら茜と言うのが私の真名だと思います」

これを聞いた三人は 目を見開いた。

星「では、いきなり真名を許されたのですか!？」

茜「まあそう言うことになりますね。ですが名乗るたび驚かれるのもどうかと思うのでこの世界では一時的に名前を変える事にします」

稟「わかりました。それで、何と言う名前にするんですか？」

茜「そうですね、では読み方を変えて性は姫^き、名は神^{しん}、字は刀赤^{とうせき}、真名は茜^{あかね}にします。因みに字は今思い付いた物です。好きに読んで下さい」

星「私は主と呼ばせて頂きます」

風「風はお兄さんと呼ばせて貰いますー」

稟「では私は茜殿と呼ばせて貰います」

茜「はい、これからよろしくお願いします? (ニコッ)」

茜は再び爽やかスマイルを無意識に発動した。

三人「「／／／」」

どうやら効果は抜群のようだ。

こうして、茜はこの世界で最初のつながりを手に入れたのだった……

オマケ

星「そう言えば、主には好きな人いますか？」

それは唐突な質問だった。そして稟や風もこの質問に反応していた。どうやら二人も興味津々のようだ。

茜「私はみんな好きですが？」

さも当然のように言った。

星「言い方が悪かったです。恋人はいますか？」

今度は茜にもわかるように言った。

茜「ああ、そっちの意味ですか。もちろんいますよ、それもありの人数ですね」

星「なんと…」

凜「予想外の答えです…」

風「英雄色を好むとは、お兄さんの事を言うのでしょうか」

茜「恋愛も恋人というつながりに関係しますからね、世界を旅してつながりを作ってるうちにかなりの人数になったんですよ」

風「なるほどー、そういう事ですかー」

星「ではこの世界では？」

茜「私がこの世界で最初に出会った女性が貴方達なんです。いるほうがおかしいです」

これを聞いた三人は…

星「そうですか！」

風「風は安心したのですよー」

星と風は顔に輝きが戻り。

稟「これは私達で茜殿を奪い合ってそして最後は四人で……………ぶは！」

稟は妄想が暴走して とてつもない量の鼻血を吹き出した。

茜「稟は一体どうしたのですか？」

風「何時もの事なのです。はい、とんどんしますよー」

トントン

稟「フガフガ」

風が首筋を指で叩くと稟は復活した。

茜「なるほど…妄想ですか……………稟」

ダキ

すると茜は突然稟を抱き寄せた。

稟「なっ／＼茜殿！？／＼／」

茜「私は稟さえよければ構いませんよ…」

茜はそう言って稟を優しく抱き締め、

稟「／＼／」

稟は惚けていた。

風「なんだかお兄さんの様子が先程と打って変わって違いますね」

星「どうやらコレが原因のようだぞ」

そう言って星がさしたのは、先程茜が飲んでいた酒だった。実は話が終わった後、星たちは茜と酒を飲んでいたのだが、茜はまだ一口か二口ぐらいしか飲んでいなかった。

茜「お二人も」

ダキ

星・風「『!!!』」

すると茜は星と風も抱き寄せた。

風「おっお兄さん／＼／」

茜「私は稟だけでなく…星や風ともそういう関係をもちたいと思ってます…お二人は、嫌でしょうか…?」

星「いえ…／＼／＼そういう訳では…／＼／」

茜は普段は鈍感であるが、とてつもないフラグ体質とフェロモン体質を持ち合わせている。

因みにフェロモン体質のスイッチは普段は抑えられているのだが、茜が酒を飲むと精神が弱まりその抑えが無くなってスイッチが入り簡単に女性を落とせる用になるのだ。

当然、スイッチの入った茜に三人がかなう筈もなく、既に三人は落ちる寸前である。そして…

茜「私と、恋人としてのつながりも持ってくれませんか？」

茜が耳元で言ったこの一言で、

三人「はい／＼／＼お願いします／＼／＼」

三人は完全に落ちた。

翌日、茜が自分の隣 で裸で寝ている三人少女を見て、

茜「また…やってしまいました…orz」

と嘆いていた。

つながり×御使い×臣下の礼（後書き）

という感じです。

内容はこれからも変えないつもりです。これだけのために書き直していません。

次回、旅に出ます。内容はやはり変わってません。すいません。

オリキャラ設定（前書き）

ロボガミの説明少し変えました。

他は変えてません。

では、どうぞ。

オリキャラ設定

名前…ロボガミ

性別…男？（ロボ）

年齢…2135023歳（造られてからたった年数）

身長…165cm（茜と同じ）

体重…不明（かなり重い）

髪…茜と同じ（何故かある）

（モデルはゲーム【GUILTY GEAR】のロボカイです。）

茜が自分をモデルに作った戦闘ロボ（という設定）。ロボットのヒメガミだから、ロボガミ。自立機能を付けた結果、特徴的な喋り方をするようになった。色々な世界を茜と共に旅している。この世界では茜とは別の場所に落ちている。

武器…仕込み武器

例…指には銃、手首には小型爆弾

強さ

茜＞恋（呂布）≧ロボガミ≧本気の鈴々（張飛）

能力（機能？）

幾つかのリミッターがあり、解除する事によって一定の必殺技を使用出来るようになる。解除するには茜の許可がいる。

【メルトダウン】

リミッターを二つ解除することによって使用可能、エネルギーを暴走させて十秒後に自分を中心に半径二百メートルの大爆発を起こす。要するに自爆。使用後には、リカバリーモードが自動的に起動して最低 二十四時間（一日）たたなければ起動出来ない。

【リカバリーモード】

ロボガミがエネルギーを充電するための充電機能。一時間で三時間分の充電ができるが、太陽の光を浴びている時は効力が二倍になる。起動中は動けないが、起動中に首筋のボタンを押す事によって充電した分だけ起動する事が出来る。充電が満タンになったら自動的に起動する。

詳しくは本編で。

オリキャラ設定（後書き）

充電についての説明が少し変わってます。

喋り方は変えないつもりですが、わかりにくいので少しは分かりやすくします。

嫌わないで下さい。

できれば僕も……

力×旅立ち×つながりの誓い（前書き）

取り敢えず書けました。

一応自分なりに工夫はしています。ただそれが帰って逆効果になるだけです。すいません。

では、どうぞ。

力×旅立ち×つながりの誓い

前回、三人の少女達と仲間としてつながりを持った茜。（恋人としても持った）現在彼等は町の外にいる。何故なら……

※回送

茜「今日は三人の特殊能力を調べてみます」

三人「「特殊能力？」」

それは、唐突に言われた事だった。

茜「はい、昨日は言い忘れたのですが、私とつながりを持った人はある特殊能力を使える用になるんです」

星「それで、その特殊能力とは何ですか？」

茜「それは私にもまだわかりません。ですが、特殊能力はその人に最も合った物になります。今までかそうでしたので」

これを聞いた三人それぞれ瞳を輝かせた。

茜「とりあえず今日はその特殊能力を調べて見ます。とりあえず私

は準備をしておくので三人は町でも見て回って下さい。そして一刻後に町の外へ集合です。では」

そう言って茜は何処かへ歩いて行った。因みにこの一刻の間、風は町の書店で蔵書を読み漁っており、星は昼間から酒とメンマを楽しんでいる所を稟に見つかって説教された。それと、酔いが抜けきって無い用だったので茜が『セラピー』を使って醒ましておいた。

【セラピー】

つながりの力を相手の体に注ぎ込んで怪我や病気などを癒やす力。注ぎ込む量が多ければ多いほど難病や重傷な怪我也も治せる。

（酔いを醒ますのは微量ですんだ）

※回送終了

茜「ではまずは星からにします」

そう言って星のほうを向く。

星「それで、一体どうやって調べるのですか？」

茜「こうするんです」

そう言うとき茜は、自分の顔を右手でおおい 右目だけが見える状態にした。

茜『サーチアイ』

そう言うとき茜の右目が大きく見開かれた。

茜「……………」

そして三人を見続け、そして…

茜「わかりました」

見開いていた右目を戻して手をどけながら言った。

稟「今のは何をしたんですか？」

茜「貴方達的能力を調べました」

風「お兄さんは万能ですねー」

茜「一応私にも出来ない事はあるんですが……………まあいいでしょう。」

【サーチアイ】

自分とつながりを持った人を見る事でその人の特殊能力がわかる力

茜『クリエイト』

すると茜は自分の隣に大きな鉄の壁を出した。

茜「では星、これを貴方の龍牙（槍）で全力で突いて下さい」

茜は鉄の壁を指差しながら言った。

星「そんな事したら龍牙が傷ついてしまいますが…」

茜「大丈夫です。私を信じてください」

星「…わかりました。主を信じましょう」

そう言って星は龍牙を構えて、

星「はあああああああああ！」

鉄の壁に向かって鋭い突きを放った。そして次の瞬間、

シュバツ

星「な！」

星は驚いた。何故なら、厚さ十五センチはある鉄の壁がまるで紙のように簡単に貫かれたのだから。

星「主…これは一体……」

茜「これが貴方の能力、『貫通牙』（かんつうが）、鉄をも貫く脅威的な突きを放つ力です。きっと貴方は突きを主体とした戦い方をしてたんですね。これなら武器ごと敵を貫く事ができます」

これを聞いた星は目を輝かせた。

茜「喜んで貰えたみたいでなによります。では次は風の番です」

風「わかりましたー。それで、風はどんな能力が使えるのですかー」

茜「その事ですが、風は立ったまま寝る事ができますよね。今も寝ることは出来ますか？」

風「試してみますー」

そう言って風は目を閉じた。

茜「……………」

風「……………」

茜「……………」

風「ぐうぐう？」

茜「寝たみたいですね」

風「寝てませんよー」

どうやら寝てなかったようだ。

茜「いえ、本当に寝る必要はないのです。寝たフリでも効果はありますので」

風「それで、これには何の意味があるのですかー？」

茜「自分の手を見て下さい」

風「？何ですかこれは？」

風の手には小さな球が1つ握られていた。

茜「それはこの子が教えてくれます。『クリエイト』」

そう言って出てきたのは、

稟「犬？」

星「犬だな…」

風「犬ですねー」

そう、茜が出したのは一匹の犬だった。

茜「町を歩いてる時に偶然すり寄って来たので協力してもらおう事にしました」

犬「ワン」

稟「それで茜殿、この犬に何を協力してもらおうんですか？」

茜「たいした事ではありません。風、その球をこの犬にあててくდაさい」

風「こうですか？」

そう言って手に持っていた球を犬にあてると、

プシュン

球が何の前触れもなく突然消滅し、

犬「くゝ、くゝ?」

犬は寝息をたてながらぐっすり寝ていた。

茜「さっきの球は『睡眠呪』（すいみんじゅ）と言って自分以外の者が触ったら その触った相手をこんな風に深い眠りに誘う呪いをかけて、一週間何があっても起きなくなるんです。私も使えますが私の場合は眠らないと作れません。ですが風の場合は本当に寝て無くても作れるらしいですね」

風「なるほどー」

どうやら納得した用だ。

茜「これは結構使えますよ。敵の進路に置いておけば踏むだけで敵の戦力を一時的に減らせますし、ばれたとしても球に気をつけて進む事によって進行を遅くする事ができます。実際そうでしたので」

風「おお!、勉強になりましたー。ところでお兄さん」

茜「何ですか?」

風「こちらの犬はどうするのですか?」

未だに寝ている犬を見ながら言った。

茜「そういえば考えてませんでしたね、とりあえず後で町に連れて行って、呪いを解いておきます。では最後は稟ですね」

茜が稟の方を向いて言った。

稟「はい」

茜「まずは準備ですね、稟、私が今から言う事を何も言わずに聞いて下さい」

稟「分かりました」

稟がそう言うと、茜が稟に近づいて、

茜「ボソボソ……」

稟だけに聞こえる声で何か言い出した。

稟「……………」

茜「ボソボソ……」

稟「……………」

茜「ボソボソ……」

稟「……………ふはっ！」

すると稟が突然鼻血を吹き出して倒れた。

茜「風、お願いします」

風「はい稟ちゃん、とんとんしますよ、とんとんー」トントントン

稟「ふがふが……」

どうやら復活したようだ。

茜「とりあえず準備は整いました」

星「鼻血を出す事が準備だったのですか？」

茜「当たりですが、はずれです。正確には血溜まりを作る事です。
『クリエイト』」

そう言うとき茜は血が入った瓶を一つとマネキンを二体出した。すると茜は瓶の中に入った血で血溜まりを作り、マネキンを一体は自分の、もう一体を稟の血溜まりの上に置いた。

茜「三人共血溜まりから離れてください」

茜に言われて三人は血溜まりから離れた。

茜「ではまずは私がやります。三人共血溜まりを見て下さい」

三人が視線を血溜まりに向けるのを確認すると、茜は自分の血溜まりを見ながら言った。

茜『血の池地獄』

グサ！グサ！グサ！

すると血溜まりから 無数の武器が出て来てマネキンを串刺しにした。その後無数の武器は血溜まりと一緒に消えていった。

茜「これが貴方の能力、『血の池地獄』です。自分の血で血溜まりをあらかじめ作っておく事で血溜まりから無数の武器が出て来て、上や近くにいる者を串刺しにする力です。試しにやって見て下さい。使い方は、『血の池地獄』と一言言うだけです」

稟「わかりました」

そう言う稟は自分の血溜まりを見て、茜の言う通りにやった。

稟『血の池地獄』

グサ！グサ！グサ！

その結果、茜のようにマネキンを串刺しにした。

茜「完璧です。因みに用途は風の『睡眠呪』と同じですがこっちは無力化ではなく殺すことを主体にした物ですし使用には必ず血を流さなくてはなりません、稟の場合は鼻血を再利用出来るので大丈夫だと思います」

星「確かに」

風「ですね」

稟「正直その部分に関しては複雑な気持ち何ですが……」

全員に肯定された事によって、稟の顔は若干引きつっていた。

茜「それと突然ですが、私は三人とは別行動をとらせてもらいます」

これを聞いた三人は、

星「どういう事ですか主！」

稟「私達とは……一緒に居たくないという事ですか？」

風「風達に手を出しておきながらいきなりさよならはないと思います」

各々の意見をぶつけた。

茜「言い方が悪かったです。暫くの間旅に出て後で合流します」

稟「どういう事ですか？」

その後茜は未来から来た事、三人は史実に残っている事、この後起こる黄巾の乱の事などを詳しく話した。

茜「というわけです。そして私は旅に出て見聞を広めながら更なる仲間と拠点となる場所を探そうと思っているのです」

星「拠点はともかく、何故仲間をさがすのです？主は我らに不満があるのですか？」

茜「いいえ、確かに三人はとても素晴らしいです。ですが、私達だけではこの世界を平和にするのはかなり難しいので更なる仲間が必要なんです。それに仲間が増えれば三人がその分楽になります。三人のの事を思ってこそその仲間さがしでもあるんです」

茜の言葉に、

星「主が我らの事をそこまで思ってくれているとは、わかりました。私はもうなにも言いません。二人はどうする？」

風「風も異論はありませんー」

稟「二人が賛成して私だけ反対するわけにもいかないでしょう」

結果三人共許してくれた。

茜「ありがとうございます。では三人にはどこかの諸国に、とりあえず幽州の公孫賛さんあたりで客将として働いて黄巾党と戦って下さい」

三人「「御意（です）」」「」

茜「それと三人に渡して置くものがあります。『クリエイト』、これです」

そう言って茜が渡したのは、腕輪と指輪がそれぞれ三つずつだった。

風「これはなんですか？」

風が聞くと、茜は腕輪を手にもった。

茜「まずは腕輪ですが、簡単に言えばリミッターです」

三人「「リミッター？」」「」

茜「横文字はわからないみたいです。要するに封印です。この腕輪を付けている間は能力を抑える事が出来るんです」

星「何故役に立つ能力を封印する必要があるのですか？」

茜「でしたら聞きますが、星は手合わせや調練の度に武器を壊すつもりですか？つまりそう言う事です」

茜の言葉に星は納得した用だ。

茜「それと稟と風は鼻血と睡眠呪を瓶か何かに入れて残しておく事をお勧めします。特に血は出し過ぎたら命の危険がありますから少しづつためておいた方がいいです」

稟「はい」

風「わかりましたー」

茜「とりあえず腕輪の説明は以上です。次に指輪ですが、これは私の手作りで特に何もあります。強いて云うなら、つながりを持った仲間の証みたいなお物です」

そう、茜は集合までの一刻の大半はこの指輪を作るために使ったのだ。そしてよく見るとその三つの指輪はそれぞれ大きさが違って三人の真名が彫ってあったのだ。これを見た三人は それぞれ指輪を自分の指にはめた。

凵「茜殿のお気持ちはしっかりと伝わりました」

風「風はお兄さんに惚れ直しましたー」

星「大切にしますぞ、主」

三人はとても嬉しそうな笑顔で言った。

茜「はい」

すると茜は自分の指にはめてある指輪、空向け、三人もこの意味がわかったらしく三人も同じ用に指輪を空向けた。

星「この指輪はつながりの証」

風「例え離れていても」

凵「この指輪がある限り」

茜「つながりは永遠に繋がります」

全「」「」「我らは四人はつながりを持って世界を平和へ導く事をこの指輪に誓う」「」「」

こうして四人は、つながりを持って世界を平和へ導く第一歩を踏み出したのである。

力×旅立ち×つながりの誓い（後書き）

次回、アイツに再開します。

いきなりですいません。一応ウケ狙いのつもりでした。

多分滑りました。すいません。次は頑張ります。

再開×出会い×更なる誓い（前書き）

とりあえず投稿してみました。

前の奴よりロボガミの台詞が少しだけ増えてます。

では、どうぞ。

再開×出会い×更なる誓い

星、風、稟の三人との誓いを後、茜は旅に出た。

因みにあの犬はちゃんと茜が起こしたのだが、旅に出ようとした茜について来る気満々だったので全力で走る事でなんとか振り切った。余談だが、この時三人の少女が犬から必死に逃げる茜の姿をニヤニヤしながら見ていたとかいなかったとか。

途中、何度か賊に襲われたりもしたが、ただの賊が茜に適うはずもなく、賊は皆返り討ちにされた。

旅をしてから一週間、茜はある町に立ち寄ったのだが、

茜「なんですか……？これは……」

家は荒らされ、物が散乱して怪我人も大勢いてほぼ壊滅状態だった。

茜「ん？あれは……いえ、まずは怪我人の治療ですね…」

茜はある物を見つけたが、後回しにした用だ。

茜「しっかりして下さい、今助けます。『セラピー』」

茜は近くに倒れていた青年をセラピーで治した。

青「……うう、俺は……助かったのか？」

茜「はい、怪我は私が治しました」

青「本当か！？頼む、みんなを助けてくれ！俺に出来ることなら何でもするから！」

青年が頭を下げながら頼んだ。

茜「わかりました。でしたら村にいる怪我人を全員、町の中央に集めて下さい」

青年「わかった！」

そう言うとき青年は走って言った。

しばらくして、町の中央には、たくさんの怪我人がいた。

茜「（これはセラピーでは効率が悪いですね。『アレ』を使いますか…）」

すると茜は怪我人達の前に移動して両手を怪我人達の方へ向けて、

茜『オールヒール』

怪我人全員に能力を使った。

男1「うう…」

男2「痛みが引いていく…」

男3「これは一体…」

町人達は、傷が勝ってにふさがっていくのを不思議に思っていた。

【オールヒール】

怪我を治すことを主体とした能力。一人に集中するセラピーと違って、複数の人を治せる。

茜「治療完了…」

茜が小さく呟いた。

茜「皆さん、まずはおちついてこちらに注目して下さい」

茜がそう言うと、町人が全員茜の方を向いた。

茜「成り行き上助けましたが、まずは状況を説明してください。一体何があったんですか？」

茜のこの疑問に、町の人が説明してくれた。曰わく、この村は黄巾党に襲われたらしい。それも一度や二度ではなく、官軍も見えて見ぬ

ふりをして終いにはこの町の県令も逃げてしまったらしい。

男1「俺達にもう戦う力はない……」

男2「これから俺達はどうすれば……」

村の人達は既に希望などなかった。

茜「……………」

これを見た茜は、

茜「生きるんです……」

村人達に向かって静かに言った。

茜「皆さんが生きている今は、殺された人達も生きたかった今です。ですが、皆さんの中には殺された人に助けられて生きている人も大勢いるはずです。それは皆さんに生きて欲しかったからです、皆さんはその人達の思いを踏みにじるつもりですか？」

男1「そんなわけないだろ！本当は俺達だって悔しいさ！」

男2「でもどうしようもないだろ！」

男3「金も食べ物も殆ど無いのに、一体どうやって生きるっていうんだ！」

町人達は茜に反発した。町人達に言われた通り、食糧や金目の物の殆どは黄巾党の奴らに持って行かれた。だが茜はそれを直ぐに理解し、

茜「その事なら私がなんとかします。『クリエイト』」

たくさんのお金や食べ物を出した。

茜「此処にお金も食べ物もあります。これを使って下さい」

人達は驚いた。目の前の男が突然金や食べ物を出してそれを自分達にくれると言ったのだから。

茜「とにかく、まずは生きてください。殺された人達の方まで、皆さんが生きています」

男1「貴方は、一体……」

一人の男の問いかけに、

茜「性は姫、名は神、字は刀赤、通りすがりの天の御使いです」

茜は答えた。

男1「天の御使いって確か、今噂の……」

男2「そう言えば噂通りの格好だしさっきも突然ものを出したよな」

男3「まさか、本当に……!」

村人達が茜の言った事に各々の反応をしていたその時、

? 「大変だーーーーー!」

茜が最初に助けた青年が走ってきた。

茜「どうしたんですか?」

青「黄巾党の奴らがまた来たんだ!」

この言葉に、町人達は動揺した。

茜「皆さん落ち着いて下さい。黄巾党は此処には来ません。」

青「何言ってるんだ！黄巾党は確かにこの町に向かって来てるんだ！！」

茜「確かに黄巾党の狙いはこの村でしょう。ですが黄巾党がこの村に来る事はありません。私が行かせませんので」

これを聞いた青年や町人達は、何言ってるんだコイツ、というような目で茜を見た。

茜「私が黄巾党を倒し、この町を救います」

男3「でも、いくら天の御使いだからって、たった一人で黄巾党に勝つなんて「できます」えっ？」

茜「私は世界を平和に導く天の御使いです。町一つ救えない者に世界を救えるわけありません。それに、私は一人ではありません」

青年「どういう事だよ？」

茜「この町の入り口付近に変な物がありましたよね？アレこそが私の仲間です。今は眠っている用ですが私とアレだけでも賊の一万や二万は余裕です」

男1「マジかよ…」

男2「俺達、助かるじゃないか…?」

茜「助かります…何故なら皆さんには天がついているのですから…」

そう言う茜は町の入り口付近に向かった。

茜「やはり電源がOFFになってましたか」

町の入り口付近で、茜はある物をいじっていた。

茜「とりあえず動かしますか」

そう言ってそのある物の電源をONにすると、

？「ウガーーーー！！！！！！！！！！」

そのある物、ロボガミが動き出した。そう。茜が言っていた仲間とはロボガミの事である。

茜「久しぶりですね、ロボガミ」

ロボ「ナツ、アカネ（なっ、茜）！キサマ、サッキハヨクモ（貴様、さっきはよくも）「今はそれどころではありません」ン？」

茜「早速で悪いですが、仕事です。状況は後で説明しますので手伝って下さい」

ロボ「：ナニカワケガアルノカ（何か訳があるのか）」

茜「はい……」

ロボ「シゴトナイヨウハ（仕事内容は）……？」

茜「賊の殲滅です」

ロ「……ソウカ、ワカッタ（そうか、わかった）。アトデチャントセツメイシロヨ（後でちゃんと説明しろよ）」

茜「はい、では行きましょう」

そう言って二人は賊の方へ向かっていった。

茜「止まりなさい」

？「ああ？だれだテメエは？」

茜達は今、黄巾党の前にいた。

茜「そんな事は関係ありません、単刀直入に聞きます。あの町を襲ったのは貴方達ですか？」

黄巾「ああそうだが？それがどうしたんだ？」

黄巾党の男は隠す事も無く笑いながら言った。

茜「ロボガミ…」

ロ「イマダニジョウキョウガワカランガコイツラガクズダトイウコトハワカッタ（未だに状況はわからんがこいつらがクズだという事

はわかった)。ソレデアカネ、テキハコイツラカ(それで茜、敵はこいつらか)?」

茜「はい…」

茜は静かに言った。

茜「『サルクチュアリ』、範囲、私達と黄巾党の半径二百メートル以内」

そう言うと、茜達と黄巾党を中心に半径二百メートル以内に結界が張られた。

【サルクチュアリ】

指定した範囲に戦車でも破壊できない強力な結界を張る能力。

黄「な、テメエ!なにしやがった!」

茜が結界を作ったことに黄巾党達は混乱していた。

茜「気にしないで下さい。例え気にしたところで、今から貴方達が死ぬ事にならないんですから……」

そう言う茜はとても濃密な殺気を黄巾党達にぶつけた。

黄「ひっ……」

当然、黄巾党達が茜の殺気に耐えられる筈もなく、その殆どが恐怖で震えていた。

茜「ロボガミ、今回の目的はあくまでも殺すことです」

ロ「つまり、テカゲンナシデナグツテモイインダナ（つまり、手加減しなくてもいいんだな）？」

茜「はい、けして慈悲をあたえてはいけません。確実に全員殺すんです」

ロ「アカネガソコマデイウトハナ（茜がそこまでいうとはな）」

そう言ってロボガミも黄巾党達を見据える。

茜「行きますよ、ロボガミ……」

ロ「オオ！」

そう言って二人は黄巾党に向かって突っ込んで言った。そこからは一方的だった。茜は手に持った紅で敵を切り裂いて言った。あるものは頭を刺され、あるものは首を跳ねられ、あるものは心臓を貫かれた。そして敵も大勢で襲い来るが、茜はそれを嘲笑うかのように敵と敵の間をすり抜けていき確実に斬り伏せて言った。

一方ロボガミの方も一方的になっていた。ロボガミは茜ほど避けるのは得意ではなかったが、元々機会の体なので黄巾党が使うようなそんじょそこらのなまくらな武器では傷一つつけられず、ロボガミに向かって言った敵は殴られ、あるものは首の骨が折れ、あるものは鼻が潰されていった。

そして黄巾党もそんな二人に勝てる筈が無いので逃げる者が続出していたが、茜が使ったサンクチュアリによって逃げる場所などどこにもなく、それでも逃げようとした奴らも茜の零やロボガミの仕込み銃などの飛び道具でやられていった。そして最後の一人を殺した後、

ロ「ライセデハ…（来世では…）」

茜「良きつながりと人生を…」

と言い残して村へ帰って言った。

村へ帰る途中、茜はロボガミに全てを話した。趙雲が女だと言った時何故か目が光って気がしたが気のせいだと自分に言い聞かせた。

青年「御使い様が帰ってきたぞー！ー！」

男1「御使い様ー！ー！」

男2「貴方は町の英雄です！」

男3「ありがとうございます！」

町に着くなり、茜は町の人達に歓迎された。何しろ自分達を苦しめていた黄巾党から村救ってもらったのだから。因みにロボガミは、

ロ「クソ……、ナゼアカネバツカリ……ワシモガンバツタノニ……
(くそ……何故茜ばかり……わしも頑張ったのに……)」

茜が歓迎されているのに自分が歓迎されていない事を気にしているらしく、入り口付近でいじけていた。

茜「ほらロボガミ、そんなところでいじけては迷惑にしかありませんよ」

ロ「ナンジャ(なんじゃ)? エイユウノヨウカ(英雄の余裕か)? ソンナニエライノカ(そんなにえらいか)? エイユウハ(英雄は)」

茜の言葉にロボガミは絡んで来た。

茜「別にそういう訳では、ん?、ロボガミ」

ロ「ナンジャ(何じゃ)? エイユウ(英雄)」

茜「いいから見て下さい、あちらから何やら旗を掲げた軍勢が向かって来ます」

ロボ「ナニ(何)! マタコウキントウカ(また黄巾党か)!?」

茜「いえ、それにしても動きが整っています。とりあえず敵でないことを祈りましょう」

ロボ「テキダツタラドウスルンジャ（敵だったらどうするんじや）？」

茜「その時はまた守るだけです。誰か来たみたいですよ」

そう言うのと向こうから兵士らしき人達が数人向かって来た。

茜「止まりなさい。貴方達は何者ですか？」

茜は警戒しながら兵士に質問した。

兵「まってください。我らは敵ではありません。我らは董卓軍。この町の県令に頼まれ、救援に来ました」

全「え？」

兵士の答えに村の人と茜達は哑然とした。

あの後兵士に説明してもらうと、どうやら此処の太守はただ逃げたわけではなく、町を救うために董卓のところへ向かっていたらしい。これを聞いた町人達は太守の人をせめることなく簡単に許した。

そして現在、茜達の前には三人の少女がいた。

？「私は董卓、字はこの度は救援に遅れて誠に申し訳ありません」

？「ちょ！月え！？」

月と呼ばれたいかにも人畜無害そうでお人形のような少女が町人達に頭を下げて、眼鏡を掛けたツリ目の少女が驚いていた。どうやら彼女が董卓の用である

男1「董卓様、どうかお顔を上げてください」

男2「そうですとも。こうして、救援部隊を派遣して頂いたのですから、お礼をいいこそすれ、せめることなどできません」

大将自ら頭を下げて謝罪する姿を見て心を打たれて、町人達がお礼の言葉を述べる。次々と寄せられる言葉に、董卓も顔を上げて「ありがとうございます」と告げた。

？「それにしても、よおあれだけの数の黄巾党を撃退できたなあ」

眼鏡「確かにあの数の賊をこの人数で倒したんだから対したものね。誰が指揮を執ったの？」

眼鏡を掛けた少女とサラシを巻いた袴姿の関西弁で喋る女性が前に出て、黄巾党を倒した功労者を尋ねる。

すると町人から聞かされたのは、噂に聞いた天の御遣いだった。

天の御使いが颯爽と現れ、変わった剣を手に仲間と共に二人で全ての敵を倒した。

あれは正に天の者の成せる奇跡だと、見ていた誰もが語った。

眼鏡「はあ！天の御遣いですって！？しかもたった二人で！？」

サラシ「アホな！そないな奴が、ホンマにおったんか！？」

ロ「マアジツサイニイルンダカライルンジャロ（まあ実際にいるんだからいるんじゃない）」

サ「わあ！なんやコイツ！？」

突然現れたロボガミに、サラシを巻いた女性は驚いて武器を構えた。

ロ「ソウケイカイスルナ（そう警戒するな）。ワシハロボガミ、テンノミツカイノナカマジャ（わしはロボガミ、天の御使いの仲間じ

や」

眼「あんた人間？」

ロ「イヤ、ニンゲンデハナイナ（いや、人間ではないな）。ジャガイマハソナコトハドウデモイイジャロ（じゃが今はそんな事はどうでもいいじゃろ）」

眼「どうでもよくはないんだけど？まあいいわ。それで、ろぼがみだったっけ？その天の御使いはどこにいるの？」

ロボ「アカネジャッタラソコニイルゾ（茜じゃったら其処にいるぞ）？」

そう言ってロボガミは茜を指差す。

サラシ「アンタが天の御使いか？」

茜「はい、確かに天の御使いと名乗っています」

眼鏡「アンタ本物？」

眼鏡の少女は疑わしそうな目で茜を睨む。

茜「では私の能力の一つをお見せします」

そう言うとき茜は目の前に手を出し、

茜『クリエイト』

手の上に握り拳ぐらいの大きさ金の塊を出した。やはり初めて見る三人は驚いた。

眼鏡「な！アンタそれ何処から出したのよ！」

茜「これは私の力で出した物です。これで信じてもらえたでしょうか？」

眼鏡「ええ、こんなの見せられたら信じないわけにはいかないわ」

茜「わかりました。とりあえずこれは差し上げます」

そう言って茜は眼鏡の少女に金を差し出した。

眼鏡「え？いいの？」

眼鏡の少女は目を丸くしながら言った。

茜「はい、記念という事で貰って下さい」

眼鏡「何の記念か知らないけど…有り難く受け取っておくわ」

そう言って眼鏡の少女は金を受け取った。

董卓「では改めて、私は董卓と申します。天の御遣い様。あなた様のお陰で、たくさんの尊い命が助かりました。まずは、その事をお礼申し上げます」

そう言って董卓は頭を下げる。

茜「（どうやら、こちらの董卓は史実の董卓とは違うみたいですな。頭を上げて下さい、私が助けたいと思って助けただけですので」

董卓「それでも助けてもらった事には変わりありません」

そう言って再び頭を下げる董卓を見て茜は思った。

茜「（やはりまったく違いますね。彼女の用な優しい少女が暴政を行うなど有り得ないでしょう）」

眼鏡「ちょっと、何呆けているのよ！まさか、月で変な想像しているんじゃないわよね！」

茜「?、変な想像?」

眼「……………どうやら違うみたいね…」

茜「???」

何一つ悪意のなさそうな顔に、眼鏡の少女は完全に毒気を抜かれてしまった。

董卓「あの、御使い様はこれからどうするのですか?宜しければ私の下へ来ませんか?」

すると董卓は茜を勧誘した。普通の男ならば二つ返事で了承するか少しは考える筈である。だが、そこは茜、

茜「すみませんがお断りします」

何一つ迷いなく断ることが出来るのである。

眼鏡「アンタねえ、せっかくの月の申し出を断るの!?!」

これに対して眼鏡の少女が反発してくるが、

茜「すみません、私にはやらなくてはいけない事があるので」

再び怯む事もなく言った。

董卓「やらなくてはいけない事ですか？」

茜「はい」

董卓は茜のやらなくてはいけない事が何なのか興味があつたようなので、茜はつながりや自分が旅をしている理由、既に仲間がいることなどを説明した。

董卓「そうですか、それなら無理に引きとめるわけにもいきませんね」

茜の説明を聞いて、董卓達も納得したようだ。

茜「すみません。お詫びといつてはなんですが、私とつながりを持ちませんか？」

董卓「つながり、ですか？」

茜「はい、先ほど話した用に私はつながりを守るために旅をしてい

ます。もし貴方に危機が迫った時、つながりを守る者として、そして友として貴方を助けに行きます」

董卓「助けに……来てくれるのですか……？」

茜「はい、我がつながりにかけて」

これを聞いた董卓は、

董卓「わかりました。私は貴方とつながりを持ちます」

茜とつながりを持つ事を決めた。

茜「それでは、改めて名乗ります。私は性は姫、名は神、字は刀赤、真名は茜です。これからは茜と呼んで下さい」

董卓「真名を預けてくれるのですか？」

茜「はい、つながりを持つ者として貴方に私の真名を預けます」

董卓「わかりました。では私の事は月ゆえと呼んで下さい」

茜「わかりました。ではお願いします月」

月「はい、茜さん」

そして茜は董卓の真名を預かり、

眼鏡「月だけ真名を教えているのも嫌だし、一応僕も教えておくよ。
僕は賈馱、真名は詠よ」

サラシ「ウチは張遼、真名は霞や、よろしゅうな」

二人からも真名を預かる事になった。

茜「わかりました。では詠と霞も私の事は茜と呼んで下さい」

詠・霞「「わかったわ（でー）」」

茜「はい。それでは、今からつながりを持ちます」

そう言って茜は三人に指輪を向けた。

茜「この指輪はつながりの証です。もし危機が迫った時、損得関係なしに、つながりを守るために助けに行く事をこの指輪に誓います」

こうして、茜は新たに三人の少女とつながりを持ったのであった。

ロ「ワシカンゼンニクウキジャナ（わし完全に空気じゃな）……」

いたのか、ロボガミ……

再開×出会い×更なる誓い（後書き）

何とかここまで戻れました。

次の話で書き直しは終わりです。

迷惑かけてすいませんでした。

次回、三羽鳥に出会います。

では、さようなら。

三羽鳥×賊討伐×チート茜（前書き）

やっと追いつきました。

いくつか会話の追加や変更があります。内容は変わりません。

では、どうぞ。

三羽鳥×賊討伐×チート茜

月たちと別れてから二週間、行く先々で賊を討伐しながら旅をした結果、茜には「天の御使い」、ロボガミには「鋼の拳士」という二つ名が付いた。茜は元々行く先々で天の御使いと名乗っていたからともかく、ロボガミがこの二つ名を聞いた時、「フタツナダサツ（二つ名ダサツ）！！」と文句を言っていた。因みにいまは充電が切れているので茜がおんぶして運んでいる。

そして現在、茜はある町にいたのだから、

茜「人がいませんね」

そう、そこには人っ子一人として歩いていなかった。

茜「周りから気配を感じるから人はいるはずなんですけど「おい！その貴様、止まれ！」？」

茜が振り向くと、そこには両腕に手甲をはめた至る所に傷がある銀髪の少女が茜を鋭く睨んで臨戦態勢をとっていた。

少女1「見ない顔だが、何者だ！？」

茜「はい、私は旅をしている者で、性は「凧ちゃん！ちょっと待つー！」「待つんや凧！」？」

茜が名乗ろうとした時、露出の多い服を着た関西弁の少女と独特な喋り方をした少女が走ってきた。

少女2「凧ちゃん、その人違うと思うの」

少女3「ほれ、何処にも黄色い布付けてへんやろ」

少女1「あっ」

少女3「今気づいたんかい！」

少女1の反応に少女3がツツコミをいれた。

少女1「も、申し訳ございません！」

凧と呼ばれた少女は今にも土下座をするような勢いで茜に謝ったが、

茜「いえ、そちらにもそちらの都合があるはずですので気にしないで下さい」

茜は何一つ気にしていない様子で爽やかスマイルを繰り出し、

三人「「「ツ！
・
・
／
／
「
」

三人は顔を赤くした。

少女3 「と、ところで、兄さん結局誰なんや？」

少女3は先程の爽やかスマイルが効いていたのか少しもりながらも茜が何者なのかを聞いた。

茜「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は旅をしている者で、性は姫、名は神、字は刀赤と言います。一応自分では天の御使いと名乗っています」

三人

「？、どうしましたか？」

三人「『ええええええ！』」

茜が名乗ると、三人の少女は驚いた。

少女3 「兄さんが噂の天の御使いやったんか」

少女2「そういえば噂通りの格好してるのー」

少女1「み、御遣い様！お会いできて光栄です！あの、御遣い様の武勇は私の耳にも届いておりまして、それで、その」

茜「とりあえずまずは落ち着いて下さい」

少女1「はうっ！す、すみません／＼」

急に興奮した様子の少女を落ち着かせる。

少女2「凧ちゃんは御遣い様に憧れてるのー」

少女3「せやな、兄さんの活躍を聞くたびに自分の事みたいに喜んでったし」

少女1「ふ、二人とも！」

凧と呼ばれた少女が慌てて二人を止める。名前からしてたぶん真名であろう。

茜「そんなんですか、ありがとうございます。それでは皆さんのお名前を聞いても宜しいですか？」

少女1「は、はい申し遅れました！私は楽進、字を文謙と申します

！」

少女3「うちは李典、字は曼成や。よろしゅうな兄さん」

少女2「沙和は于禁ていうの。字は文則なの」

茜「はい、宜しくお願いします。ところで、この町はなぜ誰も外に出てないんですか？」

楽進「はい、今この街は黄巾党の襲撃を受けているのです、一時は退けましたが奴らはすぐにでもまた攻め込んでくるでしょう・・・ワタシ達義勇軍はその迎撃の準備をしていたところなのです」

李典「そんなでもってこの辺りを治めてる役人さんにも援軍を要請してるんやけど、来るのにまだ時間がかかるみたいなんや」

茜「そうですか、宜しければ私もお手伝いしましょうか？」

三人「「「えっ!」」」

茜「もちろんご迷惑になるのなら手を出しませんが…」

楽進「迷惑だなんてとんでもないです、申し訳ありません御使い様。ご助力頂けますか？」

茜「はい、宜しくお願いします。それと、私の真名は茜と言います」

楽進「ま、真名を宜しいんですか!？」

茜「はい、共にこの町を守る仲間として皆さんに預けたいと思います」

した。これからは茜と呼んで下さい」

楽進「……わかりました。私の真名は^{なぎ}凧と申します。茜様が預けてくれたのですから私も真名預けます。私の事は凧と呼んで下さい」

李典「ウチの真名は真桜や、ウチは兄さんって呼ぶからよろしゅうな兄さん」

迂禁「沙和の真名は沙和なの。宜しくなの。茜さん」

茜「沙和に真桜に凧ですね、わかりました。これから宜しくお願いします」

三人「「はい（おう）（なの）！」」「」

そして茜は三人の少女と共に町の防衛をすることになった。

真桜「そういえば兄さんはなんでまた旅なんかしとるんや？」

凧「私も気になります」

沙和「沙和も気になるの」

真桜が突然茜が何故旅をしているのかを聞いてきた。どうやら凧と沙和も興味があるようだ。

茜「旅の理由ですか？そうですね、簡単に言うとながりを守る事です」

凧「つながり？どういう事ですか？」

茜「そうですね、じゃあこの戦いが終わった後に詳しく説明します」

沙和「えゝ、沙和は今すぐ聞きたいのゝ」

茜「でしたら早くこの戦いを終わらせる事です。その後ちゃんと説明しますので」

沙和「むゝ、わかったのゝ。終わったら絶対教えてなのゝ」

茜「ふふ、わかりました。約束します」

そう言いながら、茜は小さく微笑み、

三人「「「・・・／／」「」」」

それを見た三人は再び顔を赤くした。

真桜「そ、そういえばさっきから兄さんの背中にあるそれはなんや？」

茜「背中？ ああ、ロボガミの事を忘れていました」

三人「「ろぼがみ？」」

茜「コレのことです。そういえばそろそろ動かせそうですね」

そう言うと茜はロボガミを下ろして起動させ、

ロボガミ「ウガーーーーー！！！！！！！！」

三人「「な、なんだ！（や！）（なのー！）」」

突然ロボガミが動きだした事に三人は驚いた。

この後三人にロボガミの事を説明する事と何故か真桜が「分解して調べたい！」とやってきたのを抑えるのにとっても時間がかかった。どうやら真桜は絡繰りにとっても興味があるらしくこの後もロボガミの構造に興味津々でロボガミの事ジツと見ており、ロボガミは自分の天敵にでも出逢ったかの用に真桜の事を凄く警戒していた。因みに茜の仲間という事で、ロボガミも三人から真名を受け取った。

そして現在、

茜「とりあえず状況を整理しますか」

茜達は作戦会議の用な物を行っていた。

茜「まず、敵の人数は約2000人、多く見積もって2200人、そして義勇軍は800人、その内700が歩兵で残り100が弓兵。城門は南門、東門、西門の三種類で敵が最も多く来ると考えられるのが南門、此処までいいですね？」

凧「はい」

茜「それなら南門は私が何とかします。将と兵の割り振りは既に決めています」

真桜「おお、なんや兄さん頼もしいで！」

沙和「頼りになるの」

凧「流石です、茜様…」

此処までを聞いて三人は茜を慕っていた。

ロボガミ「ソレデ、ドウイウワリフリナンジャ（それで、どういう割り振りなんじゃ）？」

茜「はい、まず将ですが、西門が沙和とロボガミ、東門を真桜と凧、南門が私です。次に兵士ですが、弓兵は全て東門に、歩兵を東門と西門で半分の350ずつ山分けです」

三人「えっ……………」

この時三人は茜の事を、何いってんだコイツ、と言いたいような目で見ていた。

沙和「茜さんの兵士は？」

茜「0ですよ？」

真桜「じゃあなんや、兄さんは一人で南門を守る気なんか」

茜「そう言う事になりますね」

凧「そんなの危険です！幾ら茜様でもたった一人で黄巾党を相手にするなんて「デキルゾ（できるぞ）」ロボガミ殿！？」

ロボガミ「アカネノツヨサハコノナカデワシガイチバンシツテイル。（茜の強さはこの中でわしが一番知っている。）アカネナラコウキントウナンカヒトリデモイチマンヤニマンハヨユウデタオセル（茜なら黄巾党なんか一人でも一万や二万は余裕で倒せる）」

凧「そ、それ程の実力なのですか！？」（。□。；）

真桜「さすがは天の御使いやな……」

沙和「すごいの」

ロボガミの話を聞いた三人は茜の強さに心底驚いていた。

ロボガミ「ソレモフツウニタタカツタバアイジャ（それも普通に戦った場合じゃ）。ホンキヲダセバジュウマンヤニジュウマンハイケルジャロウナ（本気を出せば十万や二十万いけるじゃろうな）」

だがロボガミはもつとありえない事をサラツと言い放った。

真桜「どんだけ規格外やねん……？」

沙和「凄いを通り越して怖いぐらいなの？」

これを聞いた三人の内、真桜と沙和は若干ひいていた。

茜「過大評価しないで下さいロボガミ、十万はともかく二十万は私でも少しきついですよ」

真桜「できないわけではないんやな……？」

沙和「それに十万でも十分すごいのか？」

そして茜が完全には否定しない分、真実味が増してさらにひいた。

茜「まあ、ロボガミの話はともかくとして。私なら死ぬことは無いので任せて下さい」

真桜「まあ、これだけ言ってんやから断る訳にはいかへんな」

沙和「沙和は茜さんの事信じてみるの」

風「……わかりました。絶対に死なないで下さいね」

茜「はい、三人みたいな可愛い少女を置いて死ぬつもりなどありませんので」

茜は再び齒の浮く用な台詞をサラッと言い放ち、

三人「「・・・／／／／／」」

三人は顔を再び赤くした。

茜「？顔が赤いですがどうしましたか？」

三人「「な、なんでもありません！（ないでー！）（ないのー！）
／／／」」

茜「？」

鈍い時はとことん鈍い、茜であった……

現在、茜は南門の城壁の上にいる。

茜「結構いますね」

其処から少し離れた場所から向かって来ている黄巾党を見ながら言
った。

茜「さて、死なないと約束しましたから出来れば安全策を取りたい
ですね」

そもそも、本気を出せば十万を一人で相手に出来る茜が五千にも満
たない賊を相手に危険などあるのだろうか……

茜「やはりお気に入りですね♪『万華鏡』『スワイプ』」

すると茜は分身を作り、それを吸収した後、

茜「まずは試し打ちです。『姫神砲』」

敵に向かって姫神砲を放った。

ドーン

茜「結構減りますね。これなら安全かつ効率的に減らせますね♪」

何処までも規格外な茜であった。

茜「殲滅完了。来世では、良きつながりと人生を……」

その後、茜は姫神砲を打ち続け、黄巾党は一刻もしない内に全滅した。

茜「それでは他の所を手伝いに行きますか。西門はロボガミがいるので大丈夫でしょうから東門ですね」

そう言って茜は、東門の方へ向かって行った。

東門

茜「さて、風や真桜はどこに「ドゴオオオオン」何でしょうか？」

茜が東門につくと、突然轟き音が聞こえてきたので、茜が轟き音のした方へ行ってみると、

風「はあああああ」

ドゴオオオオオン

茜「あれは風に真桜ですね。それにしても風は氣を使えるんですか」

そう茜が云う通り、風が敵に向かって氣弾を放っていた。そしてその近くに真桜の姿もあった。

茜「とりあえず行ってみますか」

一方、凧たちは、

真桜「凧、南門から聞こえた轟き音、聞こえへんくなった」

真桜が言っているのは、茜が姫神砲を放って起こる物である。どうやら東門まで聞こえていたらしい。

凧「そう言えば聞こえないな。もしかして…茜様の身に何か……」

真桜「考え過ぎやって凧、余り悪い方に考えん方がええで」

凧「確かにそうだが…真桜は心配じゃないのか？」

真桜「アホ、心配に決まっとるやろ。せやけど兄さんはウチらと約束したやないか、兄さんが約束破るわけないやろ」

凧「真桜…そうだな。茜様なら大丈夫だよな」

真桜「せやで、兄さんがそう簡単に負ける筈ないやろ」

茜「私がどうかしましたか？」

真桜「せやから兄さんが、て兄さん!？」

茜「はい、何でしょうか？」

真桜「いやいや、何フツに話しとんねん! 一体いつからいたんや」

茜「そうですね、多分「兄さんが約束を破るわけないやろ」辺りだと思います」

真桜「そんなところからおったんかいな。せめて声かけてほしかったわ」

茜「いえ、話しかけていましたよ。ただ二人とも話しに夢中で気付いてませんでしたので」

真桜「そうなんかいな。でもまあ兄さんが無事でよかったは、なあ
凧」

凧「……………」

茜「凧？」

凧「……………」

先程まで心配していた茜が無事である事と、南門にいる筈の茜が東門に、それも自分の目の前にいる事の衝撃で、凧は固まっていた。

茜「凧」ぷにっ

呼んでも反応がないので、茜は凧のほっぺを軽く突いてみた。

凧「……………は！、私は一体……………」

どうやら帰ってきたようだ。

茜「大丈夫ですか？ 凧」

凧「あ、はい、ってそうじゃありません！ 何故こちらに、南門を守っていたのでは！？」

茜「南門の敵は全て殲滅したのでこちらの手伝いに来ました」

真桜「はぁ！？ 殲滅って・・・この短時間で？」

茜「そういう事になりますね」

凧「この短時間で全て殲滅するとは…、さすが茜様です！」

真桜「絡繰りの兄さんが言った通りやな」

真桜が言っている絡繰りの兄さんとはロボガミの事である。

茜「はい、という訳でお手伝いします」

凧「わかりました！ ご助力感謝します！」

茜「はい、それでは行きましょう」

二人「はい！（おう！）」

それから、黄巾党は対して時間をかけず殲滅された。その際に使った姫神砲についても聞かれたが、「後で説明します」と言って再び戦闘を開始した。

因みに西門はロボガミが奮闘した事で東門とほぼ同時に殲滅された。

真桜「それで、兄さん。さっき兄さんが使った光はなんやったんや？」

沙和「光？」

凧「沙和も南門や東門から轟き音が聞こえていただろ。あれは茜様が口から光を放って敵を吹き飛ばしていたんだ」

沙和「何なの？それ」

茜「それについては先程の約束といっしょに話します」

沙和「そう言えば忘れてたの」

茜「いえ、せめて覚えてて下さい」

真桜「それで、兄さん。結局あれはなんやったんや？」

茜「はい、あれは………」

そして茜はつながりの事や自分がこの世界に来た理由、旅をしている理由、について詳しく説明した。

結果

茜「とりあえず私の話はこれで終わりですね」

凧「立派です！」

真桜「せやな」

沙和「なの」

三人はそれぞれ尊敬の眼差しで茜を見ていた。

茜「何がですか？」

凧「要するに貴方は、人と人との絆を守るために世界を旅して仲

間を探していると言う事ですね？」

茜「そう言うことになりますね。でもこれは私の自己満足でしかありません」

凧「それでも、他人のために戦える事はとても立派です!？」

茜「そうなんですか。でしたらそうなのでしょうね」

凧「はい。それで、茜様に頼みがあります」

そう言うと、凧はいきなり跪いて、

凧「私を茜様の仲間にしてください!」

いきなり仲間にしてくれと言ってきた。

茜「良いのですか？私は志はありますが今はただの根無し草ですよ？」

凧「そんな事関係ありません！私は貴方と共に人のために戦いんです！」

茜「凧……わかりました。お二人はどうしますか？」

真桜「風が付いていくって言うなら、ウチも付いていくに決まってるやろ」

沙和「沙和も」

茜「わかりました。では三人共、私と仲間としてつながりを持って下さい」

三人「はい！（おう！）（なの）」

こうして、三羽鳥の三人は茜とつながりを持ったのだった。

ロ「ワシ、マタワスレラレテル（わし、また忘れられてる）」（T
OT）

何かと空気になりやすい、ロボガミであった……

三羽鳥×賊討伐×チート茜（後書き）

とりあえずこんな感じです。

色々迷惑かけました。

以後、こんな事が無いよう気をつけます。

次回、霸王に会います。

因みに三羽鳥とロボガミは客将にする事に決めました。

覇王×賭け×狙われた茜（前書き）

今回はいつもより短めです。

それと、会話に不自然な所があるかも知れません。

違和感を感じたらすいません。

では、どうぞ。

霸王×賭け×狙われた茜

あの後風達と話し合った結果、星達の用にどこかで客将をして後に合流する事が決まった。その際、援軍に向かっていて曹操軍に決めた。

しばらくしたら旗を掲げた軍が向かっていると聞いてもしかやと思っ
て通した。そして今茜達の前には三人の少女がいる。

？「あなた達が救援を頼んだのね」

三人の少女の内、金髪でクルクルな髪をした小柄な少女が聞いてきた。

風「はい。救援に来て頂き感謝します」

真桜「ほんまにおおきに」

沙和「ありがとうございますの」

金髪「そう、あなた達名はなんというの？」

風「私は楽進と申します」

真桜「ウチは李典や」

沙和「沙和は于禁なの」

茜「私は姫神と言います。旅の途中でこの町に立ち寄り、賊討伐をお手伝いさせてもらいました」

ロボ「ワシハロボガミ（わしはロボガミ）、キシノナカマジャ（姫神の仲間じゃ）」

茜とロボガミが名乗ると金髪の少女がまるで新しい玩具でも見つけたような顔をした。

金髪「へえ、あなた達が噂の天の御遣いと鋼の拳士ねえ」

青髪「噂で聞いている容姿も一致しますね」

茜「確かに天の御使いと名乗っています。それと、よろしければあなた達の名前を教えてくださいませんか？」

茜が三人の少女に聞いた。

金髪「そうね、私は曹操、字は猛徳よ」

金髪の少女、曹操が名乗る。

茜「（彼女が三国の一つ、魏の霸王、曹猛徳ですか）」

？「私は夏侯惇、字は元孌だ」

黒髪的女性、夏侯惇が名乗る。

茜「（夏侯惇、どうやら猪突猛進の用ですね）」

青髪「私は夏侯淵、字は妙才だ」

青髪の女性、夏侯淵が名乗る。

茜「（夏侯淵、表面はクールに見えますが、姉の事をよく想っているみたいです）」

曹操「それより姫神。あなたに聞きたい事があるの」

茜「聞きたい事？なんででしょうか」

曹操「今回の戦、敵の兵数は義勇軍の二倍以上だった筈、一体どうやって勝ったの？」

茜「それなら私が敵の大半を受け持ったからです」

曹操「どういう事？」

茜「今回の戦いは三つの城門の内、南門が最も敵が来ると考えられ

ました。ですが、義勇軍はただでさえ人数が少ないので南門に集中したら他の二つが直ぐに破られてしまいます。ですので、私以外の人はその二つを集中的に守ってもらい、南門は私が担当しました」

曹操「それじゃあ貴方は一番敵が来る門を一人で守ったの？」

茜「正確には南門の敵1000人ぐらいを殲滅後に東門をお手伝いして200ぐらいを倒しました」

曹操「へえ」

それを聞くと曹操は茜の事をジッと見始めた。

茜「?なんででしょうか」

曹操「単刀直入に言うわ。貴方、私に仕えなさい」

すると曹操は突然茜を勧誘した。

茜「どういう事でしょうか？」

曹操「貴方のその武を私の為に振るいなさい」

どうやら曹操は茜の強さが気に入ったらしい。だが茜は董卓の誘い

も断ったのだ。

茜「そう言う事でしたらお断りします」

当然、曹操の誘いもあっさり断った。

曹操「そう、理由を聞いても「貴様あ！華琳様の誘いを断るとは、何事だ！！」」

曹操が理由を聞こうとした時、隣にいた夏侯惇が大剣を抜いて茜に斬り掛かった。だが茜はロボガミの跳び蹴りの時のように最低限の動きでそれを避ける。

夏侯惇「貴様！避けるな！」

そう言って再び茜に斬りかかろうとした時、

曹操「止めなさい、春蘭」

曹操がそれを制止した。

夏侯惇「で、ですが華琳様」

曹操「やめなさいと言っているの」

夏侯惇「は、はい・・・」

曹操の一言で夏侯惇剣は収めた。どうやら彼女には頭が上がらないようだ。

夏淵「それにしても・・・姉者の一撃をいとも簡単に避けるとは」

曹操「そうね。それで、理由を聞いてもいいかしら？」

茜「はい、私には既に七人の仲間がいます。仲間の為に私は国を得なくてはいけません」

曹操「そう…それで、その仲間はどしたの？」

茜の話聞いて曹操は疑問をぶつけた。

茜「七人の内、三人は黄巾党から色んな人達を守ってもらう為に今は客将として働いています。他の四人はこちらにいる三人とロボガミです」

そう言って三羽鳥とロボガミの方を向く。

曹操「貴女達がそうなの？」

夙「はい、私達は茜様が旅をしている理由を聞いて自分から仲間になる事を決めました」

ロボ「ワシハモトモトアカネノナカマジャ（わしは元々茜の仲間じゃ）」

曹操「そう…それで何故あなたは旅をしているの？」

茜「はい」

その後茜は自分が旅をしている理由を話した。

曹操「そう、分かったわ。とりあえず、今回は引いてあげるわ」

どうやら曹操も納得したようだ。だが…

茜「今回は、ですか。でしたら私と賭けをしませんか？」

曹操「賭け？」

茜「ええ、私が国を持ったら必ず貴女とぶつかる時が来ます。その時に私を打ち負かす事が出来たら貴女の部下として身も心も捧げま

しょう」

茜がとんでもない提案をした。

曹操「へえ、面白そうじゃない。その賭け受けて立つわ」

そして曹操はそれを了承した。

茜「おや、やる気満々ですね」

曹操「私は曹孟徳。欲しい物は必ず手に入れる・・・楽しみに待っているなさい」

茜「ふふ、わかりました。楽しみにしてます」

どうやら茜もやる気満々の用である。

茜「あっそれと、貴女に頼みがあります」

曹操「頼み？」

茜「はい、こちらにいる三人をしばらくの間客将にしてほしいんです。もちろんタダでとはいいません」

曹操「あら、何かくれるのかしら？」

茜「いえ、あげる訳ではありません。黄巾党が討伐されるまでの間ロボガミをお貸しします」

曹操「そう、それでソイツは強いのかしら」

曹操がロボガミを見ながら言う。

茜「少なくとも一騎当千は出来ます。使用法についてはこちらを」

そう言って茜は懷から一枚の紙を出して曹操に渡した。

曹操「なる程、わかったわ。その四人を客将にするのを認めるわ」

曹操は四人を見ながらそう言った。

夏侯惇「か、華琳様！私は反対です！！」

曹操「あら春蘭、私の決定に不満があるの？」

夏侯惇「そ、そうではありません、そちらの三人はともかくこんな鉄の塊が役に立つ筈ありません！！」

ロボ「オイオイ、イクラナンデモテツノカタマリハナイジャロ（いくら何でも鉄の塊はないじゃろ）せめてロボガミと呼べ」

ロボガミは自分が鉄の塊扱いされたのに不満があるらしい。

夏侯惇「うるさい！貴様など鉄の塊で十分だ！！」

ロボ「ソウカ（そうか）、ナラワシトショウブシロ（ならわしと勝負しろ）。オマエガカッタラスキニヨベ（ならわしと勝負してお前が勝ったらすきに呼べ）、タダシワシガカッタヨビカタヲアラタメテモラウゾ（ただしわしが勝ったら呼び方を改めてもらうぞ）」

夏侯惇「望むところだ！！貴様などバラバラにして海の藻屑にしてやるわ！！」

ロボ「フフン（ふふん）、ウデガナルワ（腕が鳴るわ）」

そして勝手に勝負する事を決めた。どうやら二人とも気合い十分らしい。

茜「曹操さん、いいんですか？」

曹操「いいのよ、どうせ勝負しなければ認めないわ。それにアレの強さを確かめるのにちょうどいいわ」

茜「それもそうですね」

どうやら茜も納得したらしい。

茜「それと曹操さん。私の事は茜と呼んで下さい、私の真名です」

曹操「いいのかしら？」

茜「はい、これから私が忠誠を誓うかもしれない方ですから」

曹操「そう、なら私の事は華琳と呼びなさい」

茜「わかりました。これからよろしくお願いします。華琳」

華琳「ええ、こちらこそよろしくね茜」

こうして、茜は覇王と自分を賭けた勝負の約束を果たしたのである。

余談だが、茜が華琳の真名を呼んで夏侯惇が茜を再び斬ろうとしたが再び華琳が抑えた。因みにその後華琳に真名を許す用言われ、夏侯惇はしぶしぶながら茜と真名を交換した。夏侯淵は茜を認めていたらしく、あっさりと真名を交換した。

夏侯惇の真名は春蘭、夏侯淵の真名は秋蘭である。

覇王×賭け×狙われた茜（後書き）

以上です。

やはり違和感も感じますよね。すいません。孫策の時も違和感を感じると思います。先に謝っておきます。すいません。

次回、小霸王に出会います。

言ったそばからすいません。

呉×お礼×孫策の企み

現在、茜はこの国の城にいる。何故こんなところにいるかと言うと……

※回送

曹操達と別れた後茜は再び旅に出たのだが……

茜「ここは、何処でしょうか？」

茜は迷ってしまった。

実は茜は三国の内魏と蜀の武将を仲間にして呉からも一人ぐらい誰か欲しいと思っていたので呉を目指していた。

だがこれまで出会った月（董卓）や華琳（曹操）は茜があてもなく旅をして出会った。逆に言えば会おうと考えてたらその分道がそれて会えなかったのである。ここまで言えばわかるであろう。

つまり茜はあてもなく旅をすれば良いところに行けるが逆に目指している場合は中々たどり着けないのである。現に茜なら呉に行くには三日もあれば十分なのだが既に一週間が過ぎている。

茜「取りあえず今は呉よりもどこか町に行きたいですね」

その思いが通じたのか茜はそれから歩き続けてから一刻後、町を見つけた。

茜「よかったです。取りあえずもう迷うのは嫌ですのでこの町で食事をした後、地図でも買おうとしますか」

などという事を考えながら茜は町に入ってしまった。だからであろう、茜がこの町に入る途中、呉と書いてある立て札に気づかなかったのは……

茜「結構賑わってますね」

現在、茜は町を見て回っている。因みに既に食事も済ませ、今は地図が売っている所を探している。

茜「ん？あれはなんででしょうか？」

町を歩いていると、茜は妙な人垣を見つけた。

茜「そこのお姉さん」

？「ん…儂か？」

茜「はい、私は旅をしている者なのですが、この人垣はなんですか？」

？「実は今賊が街の民を人質にとっておってな…」

茜「賊？」

そうやって茜が人垣を見ると、その間からモノクルのような眼鏡をかけた少女が賊の用な男に人質にされている。そして賊の前には褐色な肌の女性が賊を睨んでいた。

茜「よろしければ私がなんとかしますよ」

？「出来るのか？」

茜「ええ……『キャトルカム』」

そう言うとき茜の体が突然ブレだし茜の姿が消えていった。

？「な！」

茜「ご安心ください、姿を消しているだけです。では行って来ます」

そう言って賊の方へ向かって行った。

【キャトルカム】

つながりの力を自分の体に纏う事によって自分の姿を消す能力。

あの後、茜は賊にコッソリ近づいて武器を蹴り飛ばした後に姿を現した。突然姿を現した茜に賊や褐色の女性だけでなく、人質や野次馬の人達まで驚いていたが茜はそんな事関係ないとばかりに賊の腹に掌丁を喰らわして気絶させた後に女性の方へ戻った。

茜「取りあえず、解決して来ました」

？「…お、お主何者じゃ？」

茜「旅の者です…お姉さんは？」

？「おお、まだ名乗っておらんかったか…儂は黄蓋、字は公覆じゃ」

その女性、黄蓋が名乗った。

茜「（黄蓋といえば呉の宿将でした筈ですが）」

褐色「…祭、一体あれは何？」

するとさつき賊と睨み合っていた褐色の女性が黄蓋の所に来た

黄蓋「儂もよう分からん…そこの旅の者がな」

褐色「ふゝん…貴方、名前は？」

茜「私は姓は姫、名は神、字は刀赤といいます」

取りあえず茜は褐色の女性に名乗った。

褐色「姫神って、もしかして貴方、天の御使い？」

茜「はい、確かにそう名乗ってます。ところで、貴女のお名前はなんでしょうか？」

褐色「私は孫策、字は伯符よ」

褐色肌の女性、孫策が名乗る。

茜「（彼女が江東の小霸王、孫伯符ですか。という事はやはりここは呉ですか）」

孫策「…まあ立ち話も何だし、うちに来ない？ 歓迎するわよ」

茜「でしたら、お言葉に甘えさせていただきます」

そう言って茜は孫策達と城へ向かった。

※回想終了

そして茜達は城に入ったのだが…

？「雪蓮！ 仕事サボってどこ行っていたの！」

城に入った瞬間、孫策が眼鏡をかけた女性に怒られた。

孫策「ごめんなさい冥琳、ちょっとした息抜きよ、息抜き」

眼鏡「次サボったら仕事増やすから」

孫策「ちょ、それだけのご勘弁を……」

あきらかに主従関係が変わっている用な光景である。

眼鏡「で、そちらの方は？」

どうやら茜に気づいたらしい。

茜「初めまして、私は姫神刀赤といいます…あなたは？」

眼鏡「私は周瑜、字は公瑾…あなたが天の御遣い？」

茜「確かにそう名乗ってます」

周瑜は茜を疑わしそうな目で見た。どうやら疑っているらしい。

孫策「冥琳、彼は我が呉の民を救ってくれた恩人よ」

周瑜「そうでしたか、我が呉の民を救ってくれて感謝する」

黄蓋「儂からも礼をいう」

茜「いえ、気にしないでください。困っている人がいたら助ける性分です」

周瑜「それでも何かお礼をしなければ…」

どうやら何かお礼をしなければ気が済まないらしい。

茜「でしたら、二つ頼みがあります」

孫策「何かしら？」

茜「まず一つ目ですが、実は私は仲間探しの為に旅をしてるんですが、この国の人達を見させてもらえますか？」

周瑜「つまり、うちの将を勧誘するつもりか？」

周瑜は茜を睨みながら聞いた。

茜「いえ、流石に将は無理だと思えますので民や兵士の中に良さそうな人がいたらお願いしてもよろしいでしょうか？」

周瑜「そうか、どう思う？雪蓮」

孫策「別にいいわよ。ただし、相手がいいって言ったらね」

茜「はい、それとその事について聞きたい事があります」

孫策「何かしら？」

茜「陸遜、周泰、甘寧、凌統、太子慈、呂豪、この中に呉の将はいますか？」

茜は呉の有名な将を次々と出した。

孫策「陸遜と周泰はいるけど、他は知らないわね」

茜「そうですか、わかりました。では二つ目ですが、もし良い人材を見つけたらしばらくの間この国で客将にしてほしいんです」

周瑜「それはどうしてだ？」

周瑜もこの理由はわからなかったらしい。

茜「私は志はあるんですが今はただの根無し草です。ですから国を手に入れるまでは別の諸侯で黄巾党から色んな人を守ってもらっています。そして国を手に入れ兵士や兵糧の準備を整えたら全ての仲間を召集します」

孫策「あなた他にも仲間がいるの？」

茜「はい、一人は私とこの世界に落ちた者で後は私の志に共感して

くれた人が六人います。この国で更に増やすつもりです」

孫策「へえ、わかったわ。客将にしてあげる」

どうやら了承してくれたらしい。

茜「ありがとうございます。私の願いは以上です」

孫策「ええ、それと今度はこっちが聞きたい事があるんだけど」

茜「なんででしょうか？」

孫策「貴方が賊を倒す時、突然出て来たでしょ？あれは何なの？」

周瑜「突然出て来た？」

周瑜はその場にいなかったから孫策の言っている言葉の意味がわからなかった。

黄蓋「お主は見えてなかったから知らんじやろうが、姫神は何かできるといって突然姿を消して賊の前で出て来てその賊を倒したんじゃない」

茜「ああ、キャトルカムの事ですね」

孫策「きゃとるかむ？」

やはり横文字は通じないらしい。

茜「あれは自分の姿を誰にも視認出来なくする能力です」

黄蓋「なんと、そのような力を持っているとは……」

周瑜「実際に見せてくれないか？」

どうやら周瑜は気になるらしい。

茜「わかりました。『キャトルカム』」

そう言うと茜は自分の姿を消した。

孫策・周瑜「!!」

当然、周瑜や消える瞬間を見てない孫策は茜の姿が消えた事に驚いた。そしてすぐに茜は自分の姿をあらわした。

茜「こんな感じです」

周瑜「それは妖術ではないのか？」

茜「いえ、コレは私の能力の一つです」

周瑜「一つという事は、他にもあるのか？」

茜「確かにありますが一つ一つ見せてたらきりがありませんよ？」

孫策「そうね、所で姫神、貴方うちにこない？」

すると突然孫策が茜を勧誘した。

茜「今回で三回目ですね、すみませんがお断りします」

だがやはり茜はあっさり断った。

孫策「そう、それよりさっき三回目って言ったけど他にも誘われたの？」

茜「はい、此处に来るまでに董卓さんと曹操さんに誘われました」

周瑜「どちらにも有名な諸侯だな、お前はそれも断ったのか？」

茜「はい、ただし曹操さんとは賭けをしました」

孫策「賭け？」

茜「はい、私と曹操さんがぶつかる時、もし私を打ち負かしたら身も心もすべて捧げるという物です」

孫策「へえ、面白そうね」

どうやら孫策はこの賭けに興味があるらしい。

茜「でしたら貴女もこの賭けに参加しますか？」

そして茜は自ら虎穴にその身を投げた。

孫策「私も？」

茜「はい、私が曹操さんとぶつかる時、其処に貴女もいるはずですよ。もし私を打ち負かしたら呉の為に身も心も捧げましょう」

孫策「面白そうね、わかったわ。その賭け私も参加させてもらうわ」

そして身を投げた虎穴から虎が出て来た。

茜「わかりました、でしたら私の事は茜と呼んでください。これから私が忠誠を誓うかもしれないのですから」

孫策「それじゃあ私の事は雪蓮しえれんで良いわ」

茜「わかりました。これからよろしくお願いします雪蓮」

雪蓮「よろしくね茜」♪

そして二人は真名を許し合った。

黄蓋「策殿が許すなら儂もだな…儂は祭じゃ」

周瑜「はあ…私は冥琳よ」

黄蓋は笑いながら、周瑜は呆れながら真名を許してくれた。

茜「はい、よろしく願います。では私はこれで」

そう言って茜は城を後にしようとした。

雪蓮「何処に行くの？」

茜「探すにしても今日はもう遅いですので宿をとろうと思ってるんです」

雪蓮「だったらうちに泊まっていったらどう？」

茜「いいんですか？」

雪蓮「別にいいわよそれぐらい」

茜「そうですか、でしたらお言葉に甘えさせてもらいます」

雪蓮「ええ、祭、部屋に案内してあげて」

祭「分かり申した、では儂について参れ」

茜「はい、お願いします」

そう言って茜は祭について行つた。

茜が部屋を出た後

冥琳「雪蓮何を考えてるの？」

雪蓮「あ、やっぱりバレてた？」

冥琳「何年あなたと一緒にいたと思ってるの」

雪蓮「そうね、茜の血を呉に入れると思うの。そうすれば呉に天の御使いの血が入ったって事、喧伝できるでしょ？」

冥琳「……なる程、そう言う事ですか」

冥琳は呆れながら言った。

雪蓮「それに、茜にはこの国に残って欲しいのよ、だって一目見て只者じゃないと思ったもの」

冥琳「確かにそうだが茜がそれを了承するかどうか……」

雪蓮「その為に茜との賭けに勝つのよ。冥琳、作戦とかは任せたわよ」

冥琳「はあ、わかったわよ」

冥琳は呆れながら了承した。

雪蓮「ありがと。ふふ、待ってなさい茜、必ず貴方を手に入れて見せるから」

霸王だけにあらず、江東の小霸王にまで狙われた茜であった。

茜「ん？今何か妙な予感が……」

鋭い時は鋭い茜であった。

呉×お礼×孫策の企み（後書き）

取りあえずこんなかんじです。

冥琳のしゃべり方がよくわからないです。

わかる人は教えて下さい。

次回、仲間が増えます。

余裕があつたらある意味恋姫で一番知られてるアイツを出すつもりです。

できなかったらすいません。

出てきてもすいません。

理由は出てきたらわかります。

漢女（おとめ）×外史×黄巾党

茜は現在、旅に出ている。

呉の国に泊まって翌日、茜は地図が売っている場所を冥琳に聞いて町の露天商に行った。

結果、ちゃんと露天商には地図が売ってあり茜はその地図を買って呉の城に帰っていく途中、昨日茜が助けた少女を見つけて何気なく声をかけたのだ。

だが、その少女と自己紹介した時、その少女は呂豪と名乗ったのだ。

当然茜は呂豪に仲間になってくれる用交渉したのだが、呂豪は元々天の御使いに憧れていたらしく、茜に勧誘された時とても慌てていたが、何とか落ち着かせ、仲間になる事も了承してもらった。因みに呂豪の真名は亞莎^{あーしえ}である。

そして亞莎を呉に預けて茜は旅に出たのだ。

以上、状況説明終わり。

そして茜が旅に出てから既に一週間が過ぎて茜は地図にある町を目指している。

茜「もうすぐだと思いましたが…あ、見えました」

茜は方向音痴ではあるが頭が悪い訳ではない、つまり地図さえあれば絶対に迷わないのだ。

茜「取りあえず行くと…ん？」

そして町に向かおうとした時、茜はあるものを目にした。

茜「流れ星？」

そう、茜は流れ星を見つけたのだ。そして流れ星は次第に落ちてきて、

ドーーーーーン

町から少し離れた場所に落ちた。

茜「気になりますね、行ってみますか」

そして茜は流れ星が落ちた所に向かって行った。

流れ星が落ちた場所

？「此処が新しい外史かしら？」

流れ星の落ちた所にはあきらかにこの世の者とは思えないようなキモさのおさげにひもパン一丁の筋肉達磨がいた。

筋肉「あら？何かしら」

筋肉達磨はある視線に気付いてその視線の感じる方を見ると、

？「……………」

茜が最初に出会ったような髭とチビとデブの黄巾党が啞然としながら筋肉達磨を見ていた。

筋肉「いやん、この外史でもアタシはモテモテなのね。すごく熱い視線を感じるは、アタシにはご主人様がいるのに」

髭「……は！おい、ずらかるぞ！！」

しばらくして髭の男が正気を取り戻して、他の二人に言った。

チビ「くそ！流星が落ちたのを見て来てみたらとんでもないものを見ちまった！」

デブ「バケモノなんだな」

どうやら三人共考えている事は一緒のようでその場を後にしようとした。

だが次の瞬間、

筋肉「ぬわぁんですてええええええええええ！？」

筋肉達磨が突然三人の前に現れた。

チビ「わぁ！びっくりした！」

髭「ていうかお前さっき向こうにいただろ！！？」

筋肉「そんな事はどうだっていいのよ！こんなあられもない美人をとっ捕まえて、モリモリ劣情をたぎらせるならともかく、絵にも描けないバケモノですってええええ！？」

そう言うとき筋肉達磨は三人の方に突っ込んでいき、

筋肉「ふうふううう！」

ドカツ

髭「ぎゃっ！」

筋肉「ふううう！」

バキッ

チビ「うぎゃ！」

筋肉「ぬっふうううん！」

ドゴッ

デブ「おご！」

三人を簡単にやっつけた。

筋肉「愛は勝つ！」

そして親指を立てながらそういった。

茜「この辺りでしたでしょうか？」

そこへ茜がやって来た。

筋肉「あらん、いい男？」

茜「ん？だ、誰ですか貴方」

さすがに茜もコレは怖いらしい。

筋肉「アタシの名前は貂蟬ちようせん、可憐な乙女にして、絶世の美・女」

これを聞いた茜は、

茜「（貂蟬：有名な武将が全員女性でしたので男だとは思いましたが、絶世の美女がこのような姿になっているとは……）」

頭の中で驚いていた。

茜「ん？あれは黄巾党でしょうか？」

すると茜は先程貂蟬がやつつけた黄巾党に気付いた。

茜「死んではない用ですね、取りあえずこの人達に何があったか聞きますか。『オールヒール』」

そう言うと茜はオールヒールを使って三人を治した。

三人「は！」

そしたら三人はすぐに起き上がったのだが、

貂蟬「？」

髭「げ、おい！早く逃げるぞ！」

貂蟬を見た瞬間、三人は一目散に逃げて行った。

茜「あ、お待ちください。聞きたい事が…行ってしまいましたか」

その後茜は貂蟬の方を見たが……

貂蟬「うふっ（舌だしウインク）？」

茜「（この人とは出来れば関わりたくないですね？）では、私はこれで……」

そう言って茜はその場を後にしようとしたら、

貂蟬「ちょっと待ってちょうだい」

バケモノが茜を呼び止めた。

茜「（見逃してください）な、何でしょうか？……？」

茜は心の中で本音を叫びながら引きつった顔で聞いた。

貂蟬「聞きたい事があるんだけど、
ご主人様、天の御使いを知らないかしら？」

だが天の御使いと言う単語を聞いた時、茜の顔が少しまともになった。

茜「天の御使いは私ですが……」

貂蟬「アナタがそうなの？」

茜「少なくとも占いで言っているのは間違いなく私です」

貂蟬「この世界の占いはどんななの？」

茜「たしか《天より流星が舞い降りし時、紅き衣を纏いし者現る。その物は、異能の力で乱世を平和へと導く天の御使いである》だった気がします」

それを聞いた貂蟬は何故か複雑な顔になった。

茜「こちらからでもいいですか？」

貂蟬「あら、何かしら？」

茜「単刀直入に聞きます、貴方はこの世界の人ですか？」

茜は貂蟬に妙な質問をした。

貂蟬「どういう事？」

茜「先程あなたは私に「この世界の占いはどんななの？」と聞きましたね？」

まるで他にもこの世界がある用な物言いです」

貂蟬「！！」

凶星を突かれて貂蟬は顔をしかめた。

茜「どうやら本当にある見たいですね、そして先程の質問からして貴方はその世界にも行っている、貴方がこの世界の人でないのは確かです」

貂蟬「アナタは一体何者なの？」

茜「性は姫、名は神、字は刀赤、真名は茜です。前の名前は姫神茜、異世界を旅する者です」

貂蟬「そう……」

茜「詳しく聞きたいので近くの町までついて来てください食事位ならおごりますよ」

どうやら貂蟬と町に行く事が決まったらしい。

貂蟬「あら、中々気前がいいのね？」

茜「あまり近づかないでください、暑苦しいのです」

貂蟬「だあああれが

夏の日差しが涼しく感じる程暑苦しくて、

冬の寒さが暖かく感じる程の寒気を与える

歩く環境破壊ですってええええ！！」

茜「いえ、そこまで言ってますが……」

シリアスな状況のままではられない、貂蟬であった。

現在、茜と貂蟬は町のある食堂にいる。茜はただでさえ赤い執事服の用な服というこの世界では目立つ格好である。それを隣が貂蟬である、明らかに茜達はすごく目立っている。だが場所が場所なので見たら食欲を失うので、見ていないフリをしているのだ。

茜「それでは説明してもらいましょう」

貂蟬「そうね、どこから説明したらいいかしら？」

茜「この際あなたの正体はどうでもいいです問題は这个世界が何なのかです」

貂蟬「わかったわ、まず这个世界だけどアナタは歴史を知っているかしら」

茜「はい、ですが此処とは違います」

貂蟬「そう、アナタの知っている本来の歴史を正史、そしてこの世界の事を外史と言うの」

茜「外史……作られた歴史ですか」

貂蟬「ええ、外史とは正史の人間がこうあったらいいという風に考えられて作られる世界の事よ」

茜「つまり这个世界もその外史の一つと言う事ですか？」

貂蟬「ええ、ただし起点が違うわ」

茜「起点？」

貂蟬「北郷一刀、それが本来の起点よ」

茜「天の御使いですか……」

貂蟬「正確には天の御使いにされた未来人よ」

茜「私と同じですね」

貂蟬「ええ、だけどこの世界の起点は北郷一刀ではなく……」

茜「私……」

貂蟬「そう、この世界は既にアナタの外史なの」

茜「つまりこの世界は私が主人公の世界でこの世界がどうなるかは私に委ねられているという事ですね？」

貂蟬「簡単に言えばそうなるわね」

茜「…良かったです、ならやろうとした通りにやるだけです」

貂蟬「何をする気なの？」

茜「この世界のつながりを守るためにこの世界を平和にします」

貂蟬「あらあら大きく出たわね」

茜「一人では難しいでしょうが、私には既に仲間がいます。仲間と力を合わせれば、必ずできます。貂蟬、あなたはどうしますか？」

貂蟬「どうするって？」

茜「貴方もこの世界にいる限り、この物語の登場人物です。貴方さえ良ければ私と共にこの世界を平和な世の中に導きませんか？」

貂蟬「あらあら、今回の外史は中々面白いわね。わかったわこれか

らよろしくねご主人様」

茜「ありがとうございます。ですが、出来ればご主人様とは呼ばないで下さい」

貂蟬「でも、ご主人様はご主人様だから」

そんなやりとりをしていたその時、

？「たったた大変だああああっ！！？」

一人の若い男が慌てながら食堂に飛び込んできた。

女将「どうした！、何があったってんだい！？」

女将が若者にそう聞くと、

若者「こっ黄巾党の集団が！この邑に迫ってきてるんだ！それものすごい数が来てる！！！」

若者は息を切らせながらそう答えた。

女将「太守様はどうしたんだい？、これだけ大騒ぎになってたら軍が動く筈だよ？」

疑問に思った女将が再び若者に聞くと、

若者「そっ…それが……」

若者はそこまで言うとは一旦息を吸い落ち着いてから、

若者「逃げちまったんだよ!!、報せを聞いた途端に兵を全部連れて逃げちまった!!」

そう叫ぶと、

『何iiiiiiiiiiiiっ!!!?!?』

食堂全体に衝撃が走った。

茜「貂蟬、まずはこの騒ぎ鎮めて下さい」

貂蟬「わかったわ」

そう言うのと、

貂蟬「すうううううう……」

貂蟬は深く息を吸い込み、

貂蟬「ぶるあああああああ……！！！！！！」

この世の者とは思えない特大の叫び声を出すと、

『……！！……？』

周りの騒ぎは一気に鎮まった。

茜「ありがとうございます」

そう言うと茜は若者の方を向き、

茜「黄巾党はどれ位来てまか？」

と聞いた。

若者「…へっ？」

聞かれた若者は呆けた声を出す、

茜「ですから、此処に向かってきている黄巾党の数はどれ位来てるか聞いているんですが？」

茜が改めて聞き直すと、

若者「たっ確か…見た感じだと…千ぐらいの筈だ」

若者は思い出しながらそう答えた。

茜「わかりました、貂蟬」

貂蟬「わかってるわ」

そう言うとき茜は横に置いた紅を手にとって席を立ち、

茜「行きますよ」

食堂を出ようとした。

若者「ちょ、ちょっと待て、どこに行くんだ？」

だが若者が茜達を止めた。

茜「黄巾党を倒しに行くんですが？」

若者「話を聞いて無かったのか！黄巾党は千ぐらいいるんだぞ！たった二人で何が「倒せます」は？」

茜「黄巾党千人で私が負ける筈ありません」

若者「何いってんだ！勝てるわけ「まちな」何で止めるんだ女将！」

女将「いいからまちな、兄ちゃんのその格好、もしかして天の御使いじゃないか？」

女将がそう言うと、「天の御使い？」「そういえば…」などの声が出た。

茜「はい、私は姫神刀赤、天の御使いです。行きますよ貂蟬」

そう言って食堂を後にした。

そして茜達は黄巾党の所まで来たのだが……

デブ「こ、こいつらなんだな」

そこにはさっきの三人組がいた。

？「ちょっと、バケモノってホントにバケモノじゃない！
もっとうねうね動いてキモカワイイのかと思ったら、本気でキモイ
だけじゃない！！」

すると三人の少女が出て来て水色の髪の少女が貂蟬を見てそう言った。これを聞いた貂蟬は、

貂蟬「だあああれが山からワイワイ下りてきた、

物の怪キモカワ大行進ですってええええ!!」

水色「そこまで言っていないわよ!!」

壮絶な聞き間違いをしていた。

?「あ、でもあの赤い髪の人結構かっこいい。お姉ちゃん、あの人もーらい」

茜「?」

すると今度はピンクの髪の少女が茜を見て言った。どうやら気に入ったらしい。

貂蟬「アタシのご主人様をあらあら大変、こんなにたぎっちゃってどうしましようにするですってええええ!!」

ピンク「そこまで言っていないよー」

貂蟬は再び壮絶な聞き間違いをした。

茜「ん?あの、その人」

髭「ああ?なんだ?」

茜「先程その太った人が「こいつなんだな」って言ってましたが皆さんの目的はひょっとして町ではなくコレへの仕返しですか？」

茜は貂蟬を指差しながら聞いた。

髭「当たり前だ！そいつをぶち殺すにはこれぐらいは必要なんだ！」

茜「という事は貂蟬、彼らが町に向かってたのは貴方のせいではないですか？」

貂蟬「そう言う事になるのかしら」

茜「はあ、取りあえず倒しましょうか」

貂蟬「そうね、もう倒すって言っちゃったし」

茜「ですね、どうせ黄巾党は敵ですし」

そう言うとき茜は紅を抜いて、

茜「天の御使い姫神刀赤、参ります」

貂蟬「絶世の美女貂蟬ちゃん、行くわよおおおん！！！」

貂蟬と共に黄巾党へ向かって行った。当然黄巾党がこの二人に勝てるわけがなく、一刻もしないうちに黄巾党は殲滅された。因みに三人の少女には逃げられた。

一方町では、

町民「御使い様は、私達の英雄だ！」

町民「おい！御使い様を、迎える準備だ！」

町民「ああ！」

町民達が、茜の迎えの準備をしていた。

町民「ありがとうございます！」

町民「貴方様のおかげで、町は、救われました！」

茜「そんなに、かしこまらないでください」

茜は、町民から感謝の言葉を聞いているが、

茜「（あの黄巾党は貂蟬を殺した後この町を攻めたでしょうか？攻めましたね、きっと攻めた筈です）」

少し現実逃避をしていた。

若者「御使いの兄ちゃん！」

するとそこにさっきの若者が走ってきた。

茜「何ですか？」

若者「実はこの巴都は今役人が逃げて、街の者達だけで何とか運営している状態にあるんだ」

ここまでくると何が言いたいのか解ってくるが茜は黙って若者の話

を聞く。

若者「是非、兄ちゃんにこの巴都の指導者となってほしいんだ、失礼を承知で頼む」

そう言って若者は頭を下げた。

茜「頭を上げて下さい、私もそろそろ拠点がほしいと思った所なんです」

若者「じゃあ!」

茜「はい、今日から私がこの町の太守です」

全員「おおおおおおお!!」

茜がそう言うと、町人達は歓声を上げた。

貂蟬「よかったわねご主人様」

茜「ええ、これで本格的に活動出来ます」

貂蟬「こうなったらアタシ、一肌でも二肌でも全裸になるまでも脱いであげるわよん?」

茜「やめて下さい、気持ち悪いので」

貂蟬「だあああれがむこう三年三ヶ月、
毎夜毎晩夢に出て来るほど気持ち悪くて、
キモイキモイと蛙の如く
輪唱しそうになるですってええええ!!」

茜「いえ、そこまで言ってませんが……」

こうして、茜は拠点となる場所と変わった仲間を手に入れたのであった。

漢女（おとめ）×外史×黄巾党（後書き）

見ましたよね？気持ち悪かったですよね？

すいません、ある意味一番出したかったキャラなんです。受け止めてください。

次回、あわわと鈴の人を仲間にするつもりです。

違ったらすいません。

あわわ×鈴×召集

茜が巴都の太守になってから、巴都は急激に成長している。

茜は元々未来やそれ以上の知識を持っているので政務は柔軟な発想が出来る。

そして警備については日本の警備態勢を応用した。

それでも限界があるので、町の子供に穴埋めをしてもらう。

子供は、大人の目につかないところに目をつけるから不審者などを見たら通報してもらい、ご褒美をあげるといふ感じでやった結果、殆ど問題は起きてもすぐに解決できる。

だがそれでも解決出来ない所もあるのでその時は茜自信も警邏に出て問題を自らの手で解決する。茜は武は一騎当万、知も申し分なし、更に様々な能力を持っていてはつきり言って完璧超人である。そんな茜が問題を解決出来ない事などごくまれにしかない。因みに問題を起こした者は貂蟬のO・SHI・O・KIが待っているので問題を起こす者も急激に減ってきている。

次に資金だが茜は未来の知識で塩の製造が成功している。この時代塩は中々高い、だが茜には塩の製造が出来るので塩には余裕があり、本来の値段よりも安く売っても茜は十二分に特をしている。当然塩は完売するがそれでもまだ塩には余裕があるので、現在は味噌の製造をしている。

そして現在、茜は兵を集める為に義勇軍を募集したのだが……

茜「なんですか？これは……」

茜の前には既に10000の兵がいる。実は茜は旅をしながら色々な町を守っていた事でかなり人気がある。だからこそ志願兵や助けてもらった恩返しのためにどんどん集まった結果がコレである。

茜「私は人気があるんでしょうか……それとも何かの夢」

だが、茜自信は当然の事の用にやっていたので実感などわからないのである。

茜「取りあえず集まってもらったものはしょうがないですね。正に棚からぼた餅ですね」

それは、かなり違うぞ茜……

？「あ…あのう」

茜「ん？」

すると突然誰かが茜を呼ぶような声がした。

キヨロキヨロ

だが周りを見てもそれらしき人物は誰もいない。

？「あ…あのう、こっちでしゅ、あわわ……」

今度ははっきりと聞いた茜は声のしたほうを見ると……

？「あわわ……」

ハロウィンね魔女の用な帽子を被った少女の用な少女が茜を上目遣いで見ていた。

茜「えっと、先程私を呼んだのは貴女ですか？」

少女「は、はい…あの、貴方は天の御使いの姫神さんでしょうか…
…？」

茜「はい、確かに私は姫神刀赤と言いますが貴女は？」

少女「…わ、私は鳳統といいましゅ……」

幼女の用な少女、鳳統が名乗る。

茜「（鳳統：確か三国の一つ、蜀の名軍師、諸葛亮の友で鳳雛とも呼ばれた軍師ですね）それで鳳統ちゃんだっけ、私に何か用ですか？」

鳳統「：あ、あの：私を仲間にしてくだしゃい：お願いしましゅ：：あう」

鳳統は何度も噛みながらも何とか用件を伝えた。

茜「鳳統ちゃんだっけ、君は此处まで一人で来たのかい？」

鳳統「い、いえ：途中までは友達と来ました：：：友達は劉備さんの所に行きましたが：：：私は御使い様に興味がありましたので：：：」

茜「（鳳統の友達と言う事は、諸葛亮ですね）そうですか、ですが：何故私に」

鳳統「あわ：：：み、御遣いしゃまの噂と本を読んで、興味を抱いたからでしゅっ！

うう：：：噛んじやった」

茜「本？ああ、あれですか」

茜や鳳統が言っている本と言うのは茜が旅をしながら暇つぶしに書いていた旅の記録や横文字とその意味が書いてある本の事である。因みに茜の旅の記録はそんじょそこらの物語よりもすごい冒険が記されたりして中々好評である。

茜「読んでくれたんですね、どうでしたか？」

鳳統「は、はい…面白かったです」

茜「ありがとうございます。それと、本題に入りましょう」

そう言う茜は鳳統の頭に手を置いた。

茜「私の真名は茜です、私の仲間になって下さい」

鳳統「わ、私の真名は雛里ひなりでしゅ」

茜「はい、これからよろしくお願いします雛里ひな」

そう言って茜は、雛里の頭を撫でる十爽やかスマイルというダブルコンボを炸裂した。

雛里「あ、あわわ：／／／」

どうやら落ちたらしい。

こうして茜は蜀の名軍師、鳳雛を仲間にしたのだった。

茜「それと、これは続きですけど読みますか」

雛里「は、はい！」

出来てたのか……

現在、茜は遠出に出ている。

確かに茜は完璧超人である。だがどんな完璧超人でも限界はあるものの、それは茜も入る事である。

雛里が仲間になってから、政務で茜に回ってくる書簡もかなり減った。だが、それでも普通なら半日かかる量の書簡を五時間で終わらせる茜はたいしたものである。それを茜は既に一週間やり続けている。だから休憩もかねて茜には1日休みが出来たので茜は遠出に出掛けたのだ。

茜「たまにはこういうのもいいですね」

そして今茜はある森の小川にいる。

茜「ん？あれは……」

すると茜はある物を見つけた。

茜「桃ですね」

茜「むぐ、おいしいですね。雛里にピーチパイでも作ってあげますか」

そう言って茜はいくつか桃をとった。

茜「こんなところですかね、雛里喜んでくれますかね♪」

茜は雛里の笑顔を想像しながらそう言った。

茜「さて、帰りますか……と、その前に」

すると茜がある方向を見て、

茜「そろそろ出て来たらどうですか？」

そう言った。

ガサガサ

？「……………」

すると数人の男が茜を囲む用に現れた。

茜「黄巾党ではないですが、賊の用ですね」

そう言うとき茜は腰にさしてある紅を抜いた。

茜「（ん？、ふふふ）」

茜がある事に気付いて心の中で笑っていると、賊の一人が茜に向か

って剣で斬りかかってきた。

スッ

だが茜は少し横にズレるだけでかわし、

ドガッ

賊の頭を紅で峰打ちして気絶させた。

茜「一人ずつでは倒せませんよ」

茜がそう言うと、左右の賊と後ろの賊が茜に斬りかかった。

茜「（他の賊に比べると連携がとれてますね、ですが……）」

だが茜は後ろに向かって一回転するように跳んで後ろの賊の更に後ろに回り込み、

茜「（まだ甘いです）」

賊の頭に蹴りを喰らわせた。

茜「ほら、もっと頑張ってください」

その後も賊達は複数で連携して茜に斬りかかったが茜はそれを華麗に交わして徐々に賊の数を減らしていき、賊は既に二人になっていた。

茜「もう終わりですか？」

賊達も既に戦意を失いかけていたその時。

チリーーン

茜「（ん？鈴の音？）」

？「苦戦してるようだな」

すると賊の後ろから剣を逆手に持った女が出て来た。

賊1「お頭！」

賊2「甘寧様!!」

茜「（あの人が甘寧……）」

茜は甘寧を見て何かを思ったらしい。

甘寧「……………」

甘寧は武器を構えて茜を睨む、茜も紅を構えて甘寧を見据える。

甘寧「はあっ！」

最初に甘寧が斬りかかった。

茜「（速いですね）」

ガキイイイイイイン

茜はその一撃を、紅で防ぎ、

甘寧「チィッ！」

茜「ふっ」

そのまま、力任せに押し返した。

茜「（速さは中々ですね、どうやら彼女は速さと手数で勝負するみたいですね）」

甘寧「ふっ！はっ！！せいっ！！！！」

甘寧は更に茜に連撃を繰り出すが、

ガキン バキン ギヤキン

茜はそれを全て紅で受け流す。

甘寧「（完全に見切られてる！）」

茜「そろそろ、終わりにしましょう」

そう言うとき茜は甘寧の攻撃を受けずに避けた。

甘寧「！」

甘寧も今まで攻撃を受け止めていた茜が突然避けた事に驚いた。

茜「ふっ」

ガキン

茜はその隙を見逃さず甘寧の持っている剣を蹴り飛ばした。

チャキ

茜「終わりです」

そう言って茜は甘寧の首に紅を突き付けた。

甘寧「く、殺せ…」

甘寧は茜に自分を殺すようにいったが、

賊1「待ってください!」

賊2「我らはどうなってもいいですから甘寧様を殺さないでください」

賊達が土下座をして頭を下げながら甘寧を殺さない用に頼む。

茜「?何故殺さないといけないんですか?」

だが茜が言ったこの言葉に、甘寧や賊達は何言っただこいつ、という用な目をした。

茜「周りをよく見て下さい、倒れている人はみんな気絶しているだけです。私は元々貴方たちを殺すつもりなどありません」

甘寧「貴様何を言ってる、私達は貴様を殺そうとしたんだぞ」

甘寧は自分が殺されない事に何か不満がある用だ。

茜「貴方たちが殺そうとしたから私が殺さなければいけないわけはありません。それに、貴方たちには賊以外に道があると思います」

甘寧「どういう事だ…？」

どうやら甘寧達は茜の言っている事の意味がわからないらしい。

茜「私は何も考えずに貴方たちを生かすわけではありません。本来賊に成り下がった人は目に濁りがあります。ですが……」

そして茜は三人の目を見る。

茜「貴方たちの目には、曇りがありますが濁りは微塵も感じません。貴方たちは賊ではありませんが、賊に成り下がってはいません。貴方たちには他に道があります、だから私は貴方たちを生かすんです」

甘寧達は茜の話を静か静か聞いていた。

茜「そこでものは相談なんです、皆さん私の仲間になりませんか？」

三人「「は？」」

三人は茜の言っている事がわからなかったらしい。

茜「申し遅れましたが、私は性は姫、名は神、字は刀赤、巴都の太守をしています」

甘寧「姫神刀赤…まさか、貴様天の御使いか……」

茜「はい、確かに私は天の御使いです。それと、先程の誘いですが無理にとは言いません。私は巴都で待ってますのでもし仲間に気が変わったら巴都に来て下さい。では……」

そう言って茜はその場を後にした。

それから数日、

茜「雛里♪」

雛里「ひゃー！ご、ご主人様……」

雛里は城庭で本読んでいる最中、突然茜に話し掛けられた。

茜「雛里、実はピーチパイを作ったんですが一緒に食べますか？」

そういう茜の手にはピーチパイがあった。

雛里「ピーちばい？」

茜「ああ、すいません。桃を使った甘いお菓子です」

雛里「お菓子、ご主人様を作ったんですか？」

茜「はい、この前の休みに遠出をした時においしい桃を見つけたので幾つかとってきたんです」

雛里「そうなんですか、ありがとうございます。いただきます」

茜「はい、宜しければ貴女も食べますか？」

雛里「へ？」

茜がある方向を見てそう言うと、

チリーン

甘寧「……………」

そこから甘寧が出て来た。

雛里「あ、あわわ……」

茜「大丈夫ですよ雛里、遠出の時に知り合った人です」

雛里「そうなんですか？」

茜「はい、それで甘寧さん、どういうご用でしょうか？」

茜がそう聞くと、

甘寧「姫神殿……」

スッ

甘寧は突然跪いた。

甘寧「お願いします、私を貴方に仕えさせて下さい」

茜「他の人はどうしたんですか？」

甘寧「他の者は賊を解散した後、それぞれの故郷に帰っていきました」

茜「そうですか、それで甘寧さん貴女は？」

甘寧「私はあの時の姫神殿の言葉と優しさに心を打たれました。どうか、私を仕えさせて下さい」

そう言って甘寧は頭を下げた。

茜「……甘寧、私の真名は茜です、これからは茜と呼んで下さい」

甘寧「では…」

茜「はい、よろしくお願いします」

甘寧「はい、私の真名は思春です」

茜「はいこれからよろしくお願いします思春^{ニコ}」

再び茜の爽やかスマイルが発動した。

思春「……………／／／／」

思春は落ちた。

茜「ではまずは三人でピーチパイでも」

食べましようとして続けようとした時、

貂蟬「クン、クンクン、あらんご主人様達だけでおやつだなんてずるいわ。アタシもご主人様のお菓子食べたいは、むしろご主人様を食べたいは？」

バケモノが文字通り嗅ぎつけてきた。

雛里「ひっ……」

貂蟬の姿を見て雛里は怯え、

思春「おのれバケモノ、茜様に何をする気だ!!」

思春は貂蟬を警戒していた。

貂蟬「だあああれが怪奇巨大怪獣、旅の武人は見た、巴都にあられた人外の獣、ですってええええ!!」

思春「そこまで言ってないだろ！」

最後の最後で場を乱す、貂蟬であつた。

茜「雛里、そろそろ仲間を召集します」

雛里「召集、ですか？」

茜「はい、兵も兵糧も大分揃いましたのでそろそろ本格的に動こうと思います」

雛里「そうですか、わかりました。」

茜「はい、それではコレを幽州、荊州、陳留に送って下さい」

そう言って茜は三枚の紙を出す。

雛里「御意です。所でご主人様、思春さんは何処にいらっしゃるんですか？」

茜「思春でしたら私が仕事に出しています。内容は帰った時に教えます」

雛里「わかりました、では……」

そう言って雛里は部屋を出て行った。

茜「ふふ、皆さんに会うのは久しぶりですね、元気になっているでしょうか♪」

和気藹々としながら、茜はその日の仕事を終わらせた。

あわわ×鈴×召集（後書き）

以上です。

やはりキャラ崩壊が激しいですよね、
本当にすいません

ですが思春はお気に入りキャラの一人なんです。なんとか受け止めて下さい。

次回、仲間が集合します。

全ての仲間を混ぜ合わせるのはかなり骨が折れると思います。

鉢合わせ×再会×????

凧「此処が巴都……やっとうき様に会えるのか…」

巴都の前に一人の少女がいた。彼女の名は凧、茜とつながりを持った者の一人である。

真桜「はーやっとうきたでー」

沙和「沙和もう歩けないのー」

そしてその直ぐ側に同じくつながりを持った少女、真桜と沙和がバテていた。

凧「こら二人共、これから茜様に会うんだぞ」

真桜「せやかて疲れたもんはしゃあないやろ」

沙和「それに凧ちゃんはいいの、茜さんから貰った力があるから」

凧が茜とつながりを持って手に入れた能力は『内氣功』（ないきこう）、自然の中にある氣を吸収して自分の氣にする力、自分自身の氣は一切使わないから氣をいくら使っても疲れない。

凧「私は茜様から貰った腕輪を風呂と戦い以外は外さないから殆ど使わないぞ、それにその理屈だと沙和もそうだろ」

沙和の能力は『お洒落イズム』、頭の中に想像したお洒落アイテムを二つまで出せ、着ける事で体力と脚力を強化する力、因みに沙和は髪飾りと首飾りを出したが可愛いからという理由でずっと着けている。

沙和「それでも体力には限界があるの」

真桜「ちゅうかそれやとウチなんもないから一番疲れとるで」（泣）

真桜の能力は『超発明』、ただ単純に発明の成功率を上げるだけである。

沙和「でも真桜ちゃんその力で色々作ってて楽しそうなの」

真桜「楽しそうやない！楽しいんや！」

沙和の言う通り、真桜はこの能力を自分の趣味である絡繰り作りに生かして様々な絡繰りを作っている。

凧「それでも失敗が多いけどな…この前だって料理を作る絡繰りで

失敗したじゃないか……」

真桜「ああ、味良し三号くんの事か…あれはちよつと間違えただけや…」

凧「つまり真桜のちよつとは包丁が全部飛ぶのか……」

沙和「あの時は死ぬかと思ったの？」

因みにその時飛んだ包丁は何故か全部沙和の方向に飛んでいった。

凧「いっそのこと壊してしまおうか…」

真桜「そんな殺生な！」（泣）

沙和「殺生するのはあの絡繰りなの……?」

真桜「誰が上手いこと言えとーっ！」

凧「それだけ元気なら大丈夫だな…早くいくぞ」

そう言って二人を無理やり連れて行こうとした時、

星「おや? お主らは何者だ?」

そこに、星、風、稟の三人がやってきた。

風「人にものを訊ねる時は、まず自分から名乗るのが礼儀では？」

星「おや、これは失敬、私は趙雲、この国の太守、姫神殿に呼ばれてやってきた」

風「風は程立といいますー」

稟「私は郭嘉と申します」

風に正論をいわれ、三人はそれぞれ名を名乗った。

風「え？貴女たちも呼ばれたんですか？」

郭嘉「「貴女たちも」という事は貴女たちもですか？」

風「はい、私は楽進と申します。私も茜様に呼ばれてやって来ました」

真桜「ウチは李典や、よろしゅうな」

沙和「沙和は迂禁なのー」

星達が茜の仲間だとすると、風達も名乗った。

稟「茜殿は仲間を増やすのに成功したみたいですね」

風「それもみんな女の子ですねー」

星「主は私達の他に恋人を作ったようだな」

風「こ、恋人だなんてそんな…！」

星「何だ…違うのか……」

星は自分の想像と違った事がつまらないようだ。

真桜「ちゅうか姉さん達は兄さんの恋人なん？」

稟「一応そう言う事になりますね」

風「お兄さんは出会った初日に風達に手を出しましたー」

星「あの時の主はすごかったぞ」

沙和「ええ！お姉さん達茜さんとそんな関係なの！？」

真桜「初日から手を出すとはさすが兄さんやな…」

風「茜様…不潔です……」

三人は茜との関係を聞いて沙和は驚き、真桜は呆れ混じりに茜を誉

め、凧は茜の事を軽蔑していた。

星「何ならお主達も交わればよからう」

すると星が突然とんでもない爆弾発言をした。

凧「わ、私は別にそう言うわけでは「沙和はいいのー」「ウチも兄さんやったらええで」ふ、二人共！」

だが星の一言で凧は慌てだし、沙和と真桜は乗り気だった。

真桜「なんや、凧は嫌なんか？」

凧「い、いや…べつに嫌というわけでは……」

沙和「じゃあ茜さんの事好き？」

凧「それは…わからない……」

凧は難しそうな顔をしながら言った。

凧「それじゃあお兄さんの笑顔を見ていると何か自分に変えることは

ありますかー？」

風が聞いてみた。

凧「茜様の笑顔を見ると……胸の鼓動が早くなったりします」

凧は正直に答えたに違いない。

星・風「……………」

星と風は顔を見合わせて何かを思ったみたいだ。

星「では主が他の女性と話していたらどう思う？」

星が聞いてみた。

凧「え！？他の女性の人と……それは嫌です」

ちょっと暗い表情になったが答えた。

星「風、これは…」

風「間違いないですねー」

風「何かわかったんですか…?」

星と風のやりとりを見ていた風は、少し不安な表情で二人に聞いた。

星「うむ、お主は主に惚れている」

風「それも、確実ですー」

風「私が…茜様に惚れて…：／／／」

風は自分が茜に惚れていると知って顔を赤くした。

真桜「なんや、やっぱり惚れてたんやなー」

沙和「強敵現るなのー」

風「?強敵とは、どういう事だ?」

真桜と沙和の発言に風は気になったらしい。

真桜「つまり、兄さんに惚れてるんは凧だけやないっちゅう事や」

凧「何！てことは……」

沙和「真桜ちゃんも沙和も茜さんの事好きなの」

凧「い、いつからだ？」

沙和「えっと、初めて笑顔を見た時に心臓の鼓動が早くなったの、そして茜さんの事をもっと知りたいと思ったのー／／／」

真桜「確かに兄さんの笑顔は凶器やからな／／／」

言いながら二人は頬を染める。

星「ならば先程も言った用にお主達も主と交わって恋人になればよ
かろう」

そこへ星が先程の爆弾を再び投げた。

凧「貴女たちは、私達が茜様と関係をもっても問題がないんですか
？」

凧が星達に聞いた。

星「フム、問題はないな」

風「英雄色を好むですよ」

沙和「茜さんは英雄なの？」

風「きっと英雄なのですよー」

というような会話をしている途中、

真桜「あれ？　そう言えば眼鏡の姉さんはどうしたんや？」

稟が先程から何も言ってこない事に真桜が気が付いた。

風「稟ちゃんならそこですよー」

そう言って風がある方向を指差すと…

稟「……………」ピクピク

稟が鼻血を出してピクピクしながら倒れていた。多分、交わるというところが引っかけたのだろう。

星「風は気付いてたのか？」

風「風達が質問を始めた辺りから倒れました、はーい稟ちゃん、とんとんしますよー」

そう言って風がいつもの用に稟の首筋をとんとんすると、

稟「フガフガ」

稟はいつもの用に復活した。

風「あれは、何なのだろうか…」

沙和「どう受け止めたらいいかわかんないの…」

真桜「いや、そもそも受け止めていいんやろうか…」

そしてそれを初めて見た三人は軽くひいていた。

？「な、何ですか！これは」

そこに呂蒙こと亞莎がやってきた来た。

凧「また茜様の仲間でしょうか？」

星「多分そうであろう」

凧「お兄さんは好き者ですねー」

亞莎「え？え？」

この後、先程の用なりとりが再び起こった。当然、稟の鼻血も含めて。

凧「とりあえず中に入りましょう」

そう言って凧達は中に入ろうとしたら、

星「お主達の手紙には入る用書いてあるのか？」

星が妙な事を聞いた。

凧「どういう事ですか？」

凜「私達の手紙には門の前で待ってる用書かれてるんです」

亞莎「私にも書いてあります」

そう言って凜と亞莎は自分達の所に届いた手紙を出した。

真桜「あゝそう言えばそないな事書いとした氣いするな…」

沙和「なの…」

実は凜達に届いた手紙は真桜と沙和が読んで凜に伝えたので凜は手紙の内容は知らないのである。

凜「そんな重要な事忘れるな！」

そう言って凜は腕輪を外し両手に氣を溜めだした。

沙和「わー、凜ちゃん待ってなのー！」

真桜「ウチらが悪かった！もうせえへんから許してー！」

凜が氣を溜めるのを見て二人は慌てて謝る。

凧「反省したか…？」

真桜「コクコク」

沙和「コクコク」

凧に聞かれて二人は首が千切れんとばかりに激しく縦に振った。

凧「…わかった」

そう言って凧は氣を抑えて再び腕輪をはめた。これを見て二人はホッとした。

凧「ですが何故外で待つのでしょうか？」

亞莎「手紙には迎えが来ると書いてあります」

星「だとしたらその迎えは…」

どこにいろと続けようとした時、

貂蟬「むっふうふうふううんっ！！」

そこにバケモノこと貂蟬が現れた。

全員「……………」

そして貂蟬の姿を見た七人は余りの衝撃に言葉を失った。

貂蟬「どうやら全員揃ってるみたいね、ご主人様の言った通りだわ」

真桜「なあ…ウチの目おかしかったかな…なんや目の前に筋肉達磨がみえるで……」

沙和「大丈夫なの真桜ちゃん…沙和にも見えてるの……」

凧「幻ではないらしい……」

星「だとしたらお主は何者だ？」

貂蟬「あたしの名前は貂蟬、ご主人様に頼まれて貴女たちを迎えに来たわ」

亞莎「という事は…貴方が迎えなんですか……？」

亞莎は怯えながらも貂蟬に質問を投げ出す、違う事を祈りながら…

貂蟬「ええそうよ（舌だしウインク）？」

貂蟬の舌だしウインクを見た全員に寒気が走った。

沙和「真桜ちゃん…今ゾゾツてきたの！……？」

真桜「奇遇やな…ウチもや……？」

凧「私も……？」

亞莎「きゅ」

ボタン

凧「この人もお兄さんの仲間ですかねー」

星「いや…そもそも人なのだろうか……？」

凧「…お化け……」

貂蟬「だあああれが背後霊にしてはえらく肉感的で、存在感在りすぎて困っちゃうわ、ですってええええ！！」

全員が各々の意見（一人は気絶）を出す中、貂蟬は凧がぼそりと呟いた一言に反応した。

稟「はう」

ボタン

風「はい稟ちゃん、とんどんしますよー」

何故か稟が鼻血を吹き出して倒れた。

貂蟬「人って…驚いた時にも鼻血を出すのね、一つ賢くなった気がするわ」

こんなやりとりをしながら、一行は貂蟬に案内されながらも城へ向かった。因みに亞莎と稟は途中で目を覚ました。

茜「お久しぶりです皆さん」

星・稟・風・亞莎「お久しぶりです主（茜殿）（茜様）」

風・沙和・真桜「会いたかったです（でー）（のー）」

貂蟬に案内されて、現在七人は玉座の間にいる。

星「ところで主、早速で悪いですがコレも主の仲間ですか？それとそちらの少女は…」

星が貂蟬と雛里をさしながらいった。

茜「はい、こちらにいるのは鳳統といってこの太守になってから仲間になった軍師です。それとそちらは貂蟬です、自称絶世の美女らしいですが厄除けの置物とも思っ下さい。実際厄も裸足で逃げそうですし♪」

茜はとても爽やかな笑顔で言い切った。いつもはみんなを魅了する茜の爽やかスマイルも今回は効果なく、みんなは茜の言った事を心の中で肯定するだけである。

貂蟬「そんな事言わないで言わないでちょうだい、まるでアタシがバケモノみたいじゃない…」

茜「実はもう一人仲間がいるんですが今は仕事中です」

貂蟬「わっ無視？酷い酷いわ……」

茜に無視された事を気にして貂蟬はその場にうずくまった。そして茜はそれでも無視しているのでみんなも気にしない事にした。

茜「どうやら帰って来たみたいですね、思春、出てきて下さい」

茜がそう言うと、

思春「茜様…ただいま戻りました…」

何もない所から突然思春が出て来た。そして茜意外の全員は突然出て来た思春に驚いた。

因みに思春の能力は茜が呉に行った時に使った『キャトルカム』である。

茜「紹介します、彼女は甘寧と言って先程言った仲間です。思春、報告は後でいいですからまずは食事にしましょう。皆さんも此処まで来るのに疲れたはずですから、皆さんの分もありますので食べましょう」

そう言って茜がさしたのは机に乗った沢山の料理である。

真桜「さすが兄さんや！」

沙和「沙和もうお腹空いたのー！」

凧「ありがとうございます茜様」

星「メンマもありますか？」

亞莎「茜様の料理…」

全員は各々の意見を言っている。

凧「見たことのない料理ですね」

凧の言うとおり、机の上にはナポリタンやケーキなどの用なこの世界にはない料理がたくさんある。

茜「これは私の世界の料理なんです」

凧「これはお兄さんが作ったんですかー？」

茜「いえ、私にも作れますが作ったのは私ではありません」

星「どういう事ですか？」

茜「二人とも、入って来て下さい」

ガ
チ
ヤ

茜がそう言うと、二人の人物が入ってきた。

一方は茜より少し大きいぐらいで子供なら軽く睨むだけで泣き出し
 そうな鋭い目つきの紫の髪男性である。もう一人の方は風や雛里
 と同じぐらいの大きさで気の弱そうな感じの緑の髪の男の子である。

だが、その二人の顔にはある一致点があつた。

「茜様が……三人？」

全員が二人の顔を見て驚いた。何故なら、風の言うとおりに、二人は表情や雰囲気意外は容姿も髪型も茜と全く同じだからである。

茜「紹介します、私の兄弟です」

全員
「……………」

茜のこの言葉にその場に沈黙が走り、

全員「……………ええええええ！！！」

次の瞬間、部屋に驚きの声が響き渡った。

何故茜の兄弟がこんな所にいるのか…

鉢合わせ×再会×??? (後書き)

という感じです。中途半端に終わってすみません。

茜の兄弟を出したかったんです。

次回、兄弟の説明とこれからの方針です。

気に入ってもらえると嬉しいです。

兄弟×料理×方針

全員が揃う少し前、

茜「そう言えば雛里は緑に似てますね」

雛里「みどり？」

茜「私の弟です」

雛里「ご主人様には兄弟がいるんですか？」

茜「はい、弟が六人と兄が五人いて私を入れて十二人兄弟です」

雛里「じゅうに…」

余りの兄弟の多さに雛里は驚いていた。

茜「その弟の一人に緑と言う子がいて雰囲気は雛里に似てるんです」

雛里「雰囲気…ですか？」

茜「はい、体格から性格までよく似ています。それに…」

すると茜は雛里の頭に手を置いた。

茜「緑は焦ったり照れたりするとよく、ふわわって言うんです」

そう言って茜は雛里の頭を撫でだした。

雛里「あわわ…／＼／＼」

茜「やはりにてますね…」

茜は頭の中で自分の兄弟の事を想像して少し微笑んでいた。

ドゴオオオオン

茜「ん？」

雛里「あわっ！」

すると突然妙な轟き音が聞こえた。

茜「城庭の方からですね、ちょっと見て来ますので雛里は待っててください」

雛里「は、はい…」

雛里のその言葉を背に、茜は城庭に向かった。

城庭

茜「何ですか？これは…」

茜が城庭につくと、そこには茜そっくりな二人の男がいた。
正確には、一人が倒れておりもう一人は頭から地面に突き刺さっていた。

そして茜はこの二人に見覚えがあった。

茜？ 1 「いたた、失敗しちゃった」

茜？ 2 「動けない…」

すると倒れていた男の子起き上がった。突き刺さっている方も無事

らしい。

茜「緑に…紫鬼^{しき}兄さん？」

茜1? 「え?」

茜2? 「……茜?」

茜の呟きに二人は反応した。

茜1? 「茜お兄ちゃん…?」

茜「やはり緑なんですね」

茜1? 「茜お兄ちゃん!」

倒れていた男の子、緑は茜に気付くと突然茜に抱き付いた。

緑「茜お兄ちゃん…会いたかった…」

茜「状況がよくわかりません」

茜は突然の事に少し混乱していた。

茜2? 「茜…動けない…」

茜「とりあえず助けます」

ズボッ

そう言って茜は地面に突き刺さっていた男、紫鬼を引っこ抜いた。

紫鬼「ありがと…茜」

茜「まあいいですが…とりあえず状況を説明して下さい」

茜は二人から話を聞いた。茜の兄弟は茜同様に様々な世界に行っているのだが、その全てが手伝いか遊びに行っているだけである。

今回二人がこの世界にいるのは、兄弟全員が茜がこの世界に来る前の世界に行つて茜が旅立ったのを聞いて手伝いたいと思ったからである。その際茜の用に空中に出て来て緑は受け身をとったが紫鬼は失敗して頭から落ちたらしい、それで死なない二人もあるいみ茜同様に規格外である。

因みに他の兄弟は残つて遊んでいるらしい。

茜「つまり二人は私の手伝いに来てくれたんですか？」

緑「うん…」

紫鬼「そう言う事になるね」

茜「そうですか…ありがとうございます。二人がいれば心強いです」

そう言って茜は右手で緑の頭を撫で、左手で紫鬼の手を握った。

緑「ふわわ…」

茜「…やはり似てますね」

茜は頭の中で雛里思い浮かべながら言った。

現在、茜達は城の厨房にいる。あの後誰かが来た時のために茜は分身を一体残して城庭から移動した。移動中に緑と紫鬼にはこの世界の事を話しておいたのでそこがどういいう世界かは既に知っている。

茜「それでその仲間がもうすぐ来るので二人には料理とお菓子を作ってほしいんです」

紫鬼「なる程ね…わかったよ」

緑「僕もわかった。美味しいケーキを作るね」

茜「ありがとうございます。後で呼びますのでその時にみんなと自己紹介してください」

二人「わかった」

それを聞いて、茜は雛里の所に戻っていった。

茜「というわけなんです」

茜はこれまでのいきさつを全員に話した。

星「なる程、そういう事ですか」

真桜「ちゅうか頭から地面に突き刺さるなんてありえるんか…?」

沙和「普通ならありえないのー?」

茜「そこは私の兄弟だからという事で…」

そう言うとは故か全員納得した。

茜「それで納得されるのも少し複雑ですが……」

風「ですが規格外な事は変わりませんのでー」

茜「……否定出来ません」

稟「とりあえず、この料理は茜殿のご兄弟が作ったんですね?」

茜「はい、料理を紫鬼兄さんが、お菓子は緑が作りました。それでは二人共自己紹介してください」

そう言って茜は二人の方を見た。

紫鬼「僕の名前は紫鬼…説明してもらった通り、僕は茜の兄だよ…」

最初は紫鬼が名乗った。

紫鬼「ん?」

雛里「ひっ…」

すると紫鬼は何故か雛里の方を向いた。

紫鬼「君…さっきから震えているけど寒いのかい…？」

そう言って雛里の方に近付いていった。

雛里「ひっ…」

だが雛里はすぐに茜の後ろに隠れてしまった。

茜「どうしたんですか？雛里」

茜が聞くと、

雛里「怖い……」

雛里はぼそりと呟いた。これを聞いた紫鬼は、

紫鬼「……………」

無言のまま部屋の隅っこに歩いて体操座りしていじけてしまった。

真桜「げ…元気だし紫の兄さん、ウチらは紫の兄さんの事怖ないから（ホンマは怖いけど…）」

真桜が紫鬼の事を慰める。

紫鬼「そうだね」

真桜「立ち直り早！」

紫鬼は直ぐに立ち直った。

茜「こんな風に紫鬼兄さんは見た目に似合わず中々面白いんです」

紫鬼「それ…誉められてる？」

茜「はい」

紫鬼「じゃあいいや…」

このやりとりを見ていた全員は、

全員「……………」

紫鬼の事を少し哀れみの目で見ていた。先程まで怯えていた雛里までもが紫鬼の事を哀れんでいた。

茜「では、次は緑です」

緑「う、うん…」

そう言うのと緑は少し前に出た。

緑「ぼ…僕は緑と言います、茜お兄ちゃんの弟です…」

緑はおずおずとしながら自己紹介をした。

思春「ん？この感じ…どこかで見たことが……」

すると先程まで一言も喋っていなかった思春が喋り出した。

茜「ああ、それは雛里の事ですね」

雛里「へ?」

雛里は突然自分の名前を出された事に驚いた。

茜「雛里、ちょっと緑の隣に立ってくださいか」

雛里「は、はい」

そう言うとき雛里は緑の隣まで歩いていった。

茜「ほら、この二人なんとなく雰囲気似てますよね」

全員「確かに」

二人「あわわ…（ふわわ…）」

此処に新たなコラボが誕生した。できれば「はわわ」もコラボさせたいです。

茜「今何か聞こえたかな…まあいいです、それでは食事を…と、その前に」

そう言うとき茜はいつの間にか立ち直った貂蟬の方を向いた。

茜「貂蟬、しばらく部屋を出てください」

貂蟬「どうして？」

茜「コレ、何て読みますか？」

そう言うとき茜は空気と書かれた一枚の紙を出した。

貂蟬「？くうきだけど…」

それを聞くと、

茜「そうですか…『睡眠呪』」

プシュン

茜は睡眠呪で貂蟬を眠らせた。

茜「読めるなら出て行ってください、食欲が失せます。誰かある」

兵士「は！」

茜「コレをどこかに運んでください、なんなら捨ててもかまいません」

兵士「は！」

兵士は少し嫌そうな顔をしながら貂蟬を引きずって行った。

茜「それでは食事に行きましょうか」

何事も無かったかの用に全員に言った。

全員「……………」

茜「どうかしましたか？」

全員「なんでもありません（ないで）（ないのー）！」

どうやらスルーする事にしたようだ。

全員「ご馳走様でした」

緑・紫鬼「お粗末様でした」

真桜「それにしても紫の兄さんが作ったたこやき、美味かったな」

沙和「どりあっていうのも美味しかったのー」

凧「かれーというのがよかったです」

三人は満足そうな顔をしている。因みに星はカツ丼、稟と思春は刺身、亞莎はナポリタン、凧と雛里はケーキが気に入ったらしい。

茜「二人共また腕を上げたんじゃないですか？」

緑「茜お兄ちゃんに比べればまだまだだよ」

紫鬼「これからも頑張るよ……」

そう言いながらも、二人は嬉しそうな顔をしている。

星「主は料理も出来るのですか？」

茜「一応二人に料理とお菓子作りを教えたのは私です」

緑「茜お兄ちゃんのは僕達よりも美味しいんだ」

紫鬼「茜が100点なら、僕達は88点だね…」

星「それはすごいですな」

真桜「ウチは兄さんの料理食べてみたいで」

沙和「沙和も食べてみたいのー！」

凧「私も気になります」

凧「確かに、この料理も美味しかったですね」

風「これより美味しいなら風も気になります」

亞莎・雛里「茜様（ご主人様）の料理……」

思春「……………」

全員、茜の料理が気になるらしい。

茜「でしたら今度作りましょうか？」

全員「是非お願いします!!」

全員が声を揃えて言った。

茜「わかりました、それと思春、報告をお願いします」

思春「は!」

思春は一枚の紙を出し、茜に渡した。

貂蟬「ごー主人様ー!ー!ー!」

すると睡眠呪で眠らせた筈の貂蟬がやってきた。

茜「どうやら呪いも裸足で逃げ出したようですね、ですが丁度いいです」

茜は思春に渡された紙を見ながら言った。

茜「やはりそうでしたか……皆さんに聞いてほしい事があります」

茜「私と貂蟬意外は知らないでしょうが、私がこの国の太守になる前に黄巾党が攻めて来たんですが…その中に三人の少女が混ざってたんです。それも人質という感じではありませんでした」

貂蟬「アタシの事をキモイと言った娘達ね、全く失礼しちゃうわ」

全員「（それは普通だな（です）（なの）（やで）…）」

茜「まあそれは置いと…捨てといて、気になって思春に調べてもらった結果、三人は黄巾党の首謀者、張三姉妹でした」

全員「ぶーーーー！！」

茜の口から出たとんでもない言葉に、全員はお茶を吹き出した。

茜「それと三人を仲間にするつもりです」

全員「えええええーーーー！！！！？」

茜の口から更にとんでもない言葉が出て、全員は絶叫した。

茜「理由なら三つあります。まず一つ目ですが、彼女達は元々は旅芸人だったのですがある日何らかの方法で好評になりました。私が黄巾党の兵士を貂蟬を使ってごうも…尋問して手に入れた情報によると……」

言い直したある物凄い発言に全員がひいているのをよそに茜は話を続ける。

茜「張三姉妹は追っかけに対して歌で天下をとると言ったのですが、追っかけはそれを天下を統一すると勘違いして暴動を起こして彼女達も止められなくなって黄巾党となったんです。つまり彼女達は加害者ではなく被害者です。だから私は彼女達を助けたいと思ったんです」

茜の話を聞いて全員は、なるほど…と思った。

茜「二つ目ですが、彼女達の使用おうと思ってるんです」

稟「そう言う事ですか…」

稟を始め、軍師組は茜の言おうとしている事がわかった。

星「お主らはわかったのか？」

稟「黄巾党はそもそも三姉妹の追っかけが暴動を起こしたものです」

雛里「暴動を起こした追っかけの人は三人にも止める事ができずに黄巾党になりました」

風「ですが、お兄さんならその心配はありませんのでー」

亞莎「茜様なら追っかけを抑える事が出来るのでその追っかけを兵士にするつもりなんです」

茜「はい、100点です。あの人を集める能力は中々のものですのでそれを使わせてもらおうと思ったんです。幸い、三姉妹の正体を知っているのは私達だけです」

風「どういうことですか？」

茜「私は偶然三人を見たからいいですが、黄巾党は私意外では情報を漏らした事が一度も無いので誰も三姉妹の正体は知らないんです。因みに現在の黄巾党首謀者の想像図はこれらしいです」

茜が懷から想像図が描かれた紙を取り出した。そこには身長3mはあろうかと言う髭を生やした凶暴そうな大男が描かれている。御丁寧に腕は8本、足が6本、頭に鋭利な角が3本、長い尻尾も生えていた。

全員「（ありえない……）」

茜「つまり世間の認識など、この程度と言う事です。これなら仲間にしても情報操作で何とでもなります」

全員が茜の説明に再び納得した。

茜「最後に三つ目ですが、個人的にはこれが一番の理由です」

真桜「それで、その三つ目はなんなん？」

茜「皆さんは知っているでしょうが私は元々つながりを守るためにこの世界に来ました。少し見ただけですが、彼女達のつながりは見逃しているものではありませんでした。くだらない理由でしょうが、これが私です。笑いたかったら笑ってください…」

茜の声が段々と小さくなっていく。正直、茜の考えは甘いだろう。

星「私達は主について行く事を決めています」

稟「茜殿に口出しするつもりなどありません」

風「寧ろその方がお兄さんらしいです」

凧「私は茜様のそう言う所に憧れたんです。私はどこまでも茜様について行きます」

真桜「ウチもついてくでー」

沙和「沙和もー」

亞莎「私も笑ったりなどしません」

雛里「（コクコク）」

思春「茜様のために：戦います」

貂蟬「そう言う事よ、ご主人様」

だが茜の事を笑う者など、この場に一人もいなかった。

茜「皆さん：ありがとうございます。必ず三人を助けましょう、そしてこの世界のつながりを守りましょう」

全員「はい（なのー）（おう）！！」

全員のつながりが更に強く結ばれた。

管理者×イレギュラー×????

とある場所

? 1 「クソ、何なんだアイツ等は……」

? 2 「落ち着いてください左慈」

? 1 「これが落ち着いていられるか！あんなイレギュラー、初めてだぞ」

? 2 「いいから落ち着いてください、それに彼等について少し調べましたので」

? 1 「なら、さっさと言い」

? 2 「せっかちですね、まあいいでしょう。まず赤髪の方は姫神茜、緑と紫の方は兄弟の姫神紫鬼と姫神緑、そして姫神茜の発明品ロボガミ、問題なのは能力です」

? 1 「能力？」

? 2 「まずロボガミは一応リミッターがかかって強さは半減してますがそれでも一騎当万の強さを持ち魏の夏侯元丈にも圧勝したようです」

? 1 「あの夏侯惇にか？」

? 2 「はい、次に姫神緑と姫神紫鬼ですが彼等もこの世界に来て力
がかなり半減しているようですが十分な強さ持つでしょう。特に姫
神紫鬼は呂布と同等かそれ以上の力を持つでしょう」

? 1 「何！呂布を越えるだ！」

? 2 「彼等はまだいい方です、問題は姫神茜です」

? 1 「そこまで厄介なのか？」

? 2 「はい、まず武力は力は抑えてはいますが家をも持ち上げ速さ
も抑えてはいますが神速の張療が赤子に見えるほど、まさに本物の
神速です。勘も鋭く殆どの攻撃を初見で見切る、本気を出せばたと
え呂布が百人いたとしてもそれこそ赤子をひねるかの用に圧勝する
でしょう」

? 1 「……………」

? 2 「そして知謀はたぶん賢者、太公望も頭を下げるほど万能な考
え方をするので北郷一刀のように策にかけるのは無理でしょう」

? 1 「……………」

? 2 「そして最後に彼の人間性、劉玄德のような大徳に曹孟徳のよ
うなカリスマ、これらが人を引きつけてどんどん力をつけていく、
近いうち三国全てが彼の仲間となるで「もういい」よろしいのです
か？」

? 1 「聞くのも馬鹿らしくなる、何だその完璧超人は？」

? 2 「実際私達が全力でかかったとしても、彼等に勝てる確率は1厘(0・1%)あれば奇跡ですね、故に上もあきらめかけてる用なのです」

? 1 「上がか？」

? 2 「ええ、どうやらあの外史は本来出来るはずのなかった者らしく、いわばレアなものなんです。出来れば手に入れたい用なのですが彼等を見て諦めかけてるようです」

? 1 「なら俺たちは何をするんだ？」

? 2 「いつも通り倒すだけです。手に入れられるなら手に入れ、無理なら諦める、それだけのことです」

? 1 「なる程、だが奴らがいるいじょう迂闊にては出せんぞ……」

? 2 「実はその事で面白い物を見つけました」

? 1 「面白い物？」

? 2 「ええ、どうやら五湖の方に彼等意外のイレギュラーがいる用なのです」

? 1 「何！他にもイレギュラーがいるのか！？」

? 2 「ええ、ですがそのものは彼等とは違ってなにやら黒いものを感じまして、うまくいけばつぶし合ってくれるかもしれませんよ」

? 1 「つまり、つぶし合うように煽るのか……ふん、相変わらず陰

湿なやり方だな……」

? 2 「ふふ、誉め言葉として受け取ります。ですが、まだ早いです」

? 1 「どういう事だ？」

? 2 「まだそのイレギュラーについてなにも知りませんのでね、まずは情報収集ですよ」

? 1 「だが狙い通りに動くとも限らんぞ」

? 2 「その時は、打ち負かして引き込むだけです」

? 1 「なるほどな、それでいつ始めるんだ」

? 2 「三国は彼等によって必ず集まる筈ですからその時になったらイレギュラーのもとに行きましょう。それまでは情報収集です」

? 1 「ならさっさといくぞ」

? 2 「ふふ、どこまでも」

茜たちの知らない場所で、物語の歯車が今、動き出した。

五湖

? 1 「……………」

? 2 「……………」

? 1 「誰か来たね……」

? 2 「そうだね……」

? 1 「どうする……?」

? 2 「何でもいいよ……」

? 1 「じゃあほっとく……?」

? 2 「そうだね……」

二人 「ただし……邪魔な用なら消す……」

? 1 「僕達の世界の為に……」

? 2 「僕達の未来の為に……」

二人 「僕達だけの理想郷のために……邪魔な物は……全て消す……」
「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560q/>

真・恋姫無双～つながり伝～

2011年9月16日03時07分発行